

沖縄のウタキ

— その信仰・祭神・構造について —

波照間 永吉

HATERUMA Eikichi

沖縄県立芸術大学名誉教授

【要旨】 沖縄の固有信仰の中核に御嶽信仰がある。これがいつ始まったかは不明であるが、琉球・沖縄の人々の精神にとって重要なものとして存在してきたことは明らかである。それは琉球国王権にとっても同じで、王府の神話や『おもろさうし』などの祭祀歌謡にその跡をたどることができる。『琉球国由来記』（1713年）には琉球国中の929御嶽の記事がある。その記述形式は沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島それぞれ異なっているが、御嶽名、その所在地、御嶽の聖名、そして祀られる神名などが記されている。特徴的なことは、沖縄諸島・八重山諸島では御嶽の神の性別が記されていないのに対し、宮古諸島の神は性別が記され、対偶神となっているものも多いことである。また、祭祀者や御嶽での年中祭祀などについてみるべき記述が少ないことも、一つの特徴である。八重山の御嶽の神名については、その機能による命名は少なく、神への讚美の語で名前が構成される例が多いが、その意味がわからないままのものもかなりある。しかし、神名がオモロ語などで構成されていることは明らかになっており、他地域の神名との比較が課題である。

御嶽は一つの構造を持っている。その最小の組み合わせは、イベと神庭であるが、それが拝殿を持つことによって、より構造的になっていく。それを八重山の御嶽にみていると、イベ→イベの前→オンヤー（拝殿）→ミャー・メー（神庭）→鳥居という形で聖なる所から俗なる所へと空間が拡大している。イベには神役の女性しか立ち入れない。

近代以降、御嶽は様々な理由でその形態の変化を余儀なくされている。公権力による御嶽林の伐開と敷地の圧縮などの改変、戦後の米軍基地建設の為の変更だけではない。現代は都市計画や、経済活動による御嶽の移動や集合化などが各地で起こっているし、破壊と見紛うほどの重大な改変までが起こっている。これは長い歴史を持つ御嶽信仰がここで大きな変化をみせた結果であり、これは沖縄人の精神の問題と深く関わる事柄であろう。

The *Utaki* of Okinawa

— their beliefs, deities, and configurations —

Abstract : *Utaki* worship represents the core of the indigenous religion of Okinawa. Although it is unknown when this practice first began, there is no doubt that the beliefs occupy an important place in the spirit of the Ryukyu/Okinawa people. The same could also be said for the Ryukyu Dynasty court, with the importance of these beliefs revealed in the myths of the royal court and in the *Omoro-soshi*, a compilation of ancient songs and poems. The *Ryukyu koku yurai-ki* (1713), an official history of Ryukyu, records the existence of 929 *utaki* throughout the Ryukyu Kingdom. While the pattern of description varies between the Okinawa Islands, Miyako Islands, and

Yaeyama Islands, it documents the names of the *utaki*, their locations, sacred names, and the deities they enshrined. The genders of the enshrined deities are not recorded for the *on* (*utaki*) of the Okinawa and Yaeyama Islands, but gender is specified in the Miyako Islands and many are pairs of male and female deities. Another characteristic is the scarcity of descriptions of the annual ceremonies of the *utaki* and their worshipers. The names of the deities of the Yaeyama *utaki* do not reflect their function; instead, their names are created from words glorifying the deities, and there are many whose meanings are not understood. Yet the deity names are clearly based on the Omoro language and other elements, and a comparative study with the names of deities from other regions is a topic for further study.

Utaki share a common configuration. In their simplest form, *utaki* are comprised of an *ibe* (sanctuary) and a sacred forecourt and are structurally enhanced with the addition of a *haiden* (front shrine). With respect to the Yaeyama *utaki*, there is a progression from the *ibe* → area in front of the *ibe* → *onyah* (*haiden*) → *myah* or *meh* (sacred forecourt) → *torii* (gate) corresponding to a gradual transition and expansion in space from the sacred to the secular. Only women priestesses can enter the *ibe*.

Since the modern era, various circumstances have led the *utaki* to change in form. The transformation began with government authorities ordering modifications such as the clearing of *utaki* groves and a scaling down of *utaki* sites, and changes associated with the development of US military bases after World War II. At present, *utaki* face relocation and consolidation in many areas through urban planning and economic activities, some of which have led to the near-destruction of these sites. In this way, *utaki* beliefs have undergone one of the most radical changes in their long history and this transformation is closely connected to the present state of the Okinawan people's spirit.

はじめに

沖縄の固有信仰を特徴づけるものの一つにウタキ（御嶽）がある。沖縄の伝統的集落およびその周辺の自然・景観の特徴的な様相を描き出すものとしても、それは存在してきた。「沖縄人のいるところにウタキ有り」とは仲原弘哲氏の語るところであるが、まさに、沖縄人の素朴な信仰心とウタキの関係を言い当てている言葉である。これを琉球の創成神話にしてみると、1650年、時の琉球国の摂政を務めた羽地朝秀が著した『中山世鑑』の冒頭には、「阿摩美久、土石草木ヲ持下リ、島ノ数ヲバ作りテケリ。先ヅ一番ニ、国頭ニ、辺土ノ安須森、次ニ今鬼神^{ナキジン}ノ、カナヒヤブ、次ニ、知念森、斎場嶽、藪薩ノ浦原、次ニ玉城アマツマ、次ニ久高コバウ森、次ニ首里森、真玉森、次ニ島々国々ノ、嶽々森森ヲバ、作りテケリ⁽¹⁾」とある。古事記・日本書紀と比べてみても、その国土の創世が御嶽から成されたという琉球神話は特異である。羽地は島津氏支配下において、国王・間得大君（琉球国最高神女）の久高島行幸廃止や女性神職の改廃など様々な改革を行った人物であったが、その彼にして、国土創成の始まりにウタキをおく神話には手が付けられなかったのである。

御嶽の起源については『琉球国由来記』（1713年）に記された久高島の神話にもある。その一つは「(前略) 夫沐浴シテ、白衣ヲ著シ、再ビ汀ニ往向ヒ、袖ヲ攤ケ待ツ。忽然トシテ、寄来ル濤ニ副テ、壺輒袖ニ乗ル。取揚テ帰_ル家、壺ノ口ヲ開看ルニ、麦・粟・黍・籩豆・檳榔・アザカ・シキヨ、七種

アリ。是皆栽ユル種ト心得ヘテ、所所ニ此種子ヲ蒔ク（中略）檳榔高く、秀於諸木、アザカ・シキヨ、繁茂有テ、森嶽ト成ル。此森嶽ニ君真物出現、託遊アリ。実ニ神ノ在、玄嶽ナリ。粵ニ森嶽始建ツトナリ⁽²⁾という話。もう一つはこの話と大同小異であるが、後半が「コバ・アザカ・シキヨハ、二三年ニ生立ケル。随分秘蔵シテ、人不踏損ヤウニ禁ズル故、コバ、高く秀デ、アザカ・シキヨ、茂リケル也。其比、君真物出現、度々此山ニ託遊。誠ニ神遊ノ所ト見ヘタリ。念願ヲ祈ケレバ驗アリ。ソレヨリ御嶽ヲ崇始ト也⁽³⁾」となっている。後者では、人々の祈願がよく叶うところから、ここを御嶽としたということである。

この二つの話には、御嶽がクバ・アザカ・シキヨなどの植物が繁茂している所であること、そして、そこには君真物が出現すること、そしてここで祈願すれば叶えられると信じられていること、などが語られている。すなわち、御嶽には聖木が生えており、神が出現し、人々の神への祈願がなされる所であるという、御嶽の自然環境と宗教的な機能・役割が述べられているのである。これらのことは、基本的に現代のウタキの景観とウタキ信仰の基本的な部分と重なるものである。さて、このようなウタキに対する信仰はどこまで遡れるだろうか。これをみるのに最も適切なのは『おもろさうし』⁽⁴⁾である。

I 『おもろさうし』の御嶽

(1) ウタキと土地

『おもろさうし』には沢山のウタキが謡われている。ただし、「おたけ」（御嶽）という語形はない。オモロには「たけ」（嶽）・「たけだけ」（嶽々）・「～たけ」（～嶽）という形で出る。また、「もり」（杜）の呼称もあり、「たけ」の対語として使われている。一般にウタキという呼称は、現在は沖縄諸島および宮古諸島で使われる語である。八重山諸島ではオン（石垣島・竹富島・西表島など）・ワン（黒島・小浜島）・ワー（波照間島）・ウアン（与那国島）など、「おがみ」（拝み）を語源とする語で呼ばれる。この「おがみ」系統の名称は沖縄島にもあり、首里ではウガン⁽⁵⁾といい、「?utaki [御岳] よりも小さく、一部落にいくつもあって、拝む人の範囲も限られている」とされる。今帰仁では「うがーミ」といい、「タキー」（嶽）と共に使われている⁽⁶⁾。

オモロの「たけ」は「かみぎやたけ」（神の嶽）・「のろがたけ」（ノロの嶽）などの語形を除くと、「あうのたけ」「あからたけ」「おもとたけ」「おぼつたけ」「おわんたけ」「かぐらたけ」「かつおうたけ」「くもこだけ」「こぼうたけ」「さやはたけ」「とたけ」「みつたけ」「やらざたけ」など、38の語形がある。これらには「とたけ」（十嶽）などの総称、「おもとたけ」「かつおうたけ」などの山岳名と重なるもの、「おぼつたけ」「かぐらたけ」などの想念上の御嶽、「くもこだけ」のように本来は御嶽の美称とみられるものなどがあり、「さやはだけ」のように固有名詞として空間が特定できるウタキは少ない。解明すべき点は多々あるが、多くのオモロで神と関わるものとして「たけ」が謡い込まれていることは注目すべきである。

ここで一つ具体的にオモロをみてみよう。

【オモロ例1】巻1-7

- | | |
|--|--|
| 一 聞得大君ぎや
十嶽 勝利よわちへ
見れども 飽かぬ 首里親国 | 1、聞得大君神が
〔十嶽が勝りまして、
見ても見飽きることのない首里親国よ〕 = R |
| 又 鳴響む精高子が | 2、その名も轟き渡る霊力高き神が R |
| 又 首里杜ぐすく | 3、首里杜グスクに R |
| 又 真玉杜ぐすく | 4、真玉杜グスクに R |

オモロそのものが短くて、具体的な行為・行動や状況がどのようなものであるかは分からない。ただ言えることは、聞得大君神が首里杜グスクに降臨し、何らかの祭祀が行われることを謡うオモロであろうこと、そして、このオモロが「十嶽」ゆえに首里が実に優れたところであることを称揚するものである、ということである。オモロは事柄・事件を叙述（歌唱）する対句部と一首のテーマを繰り返して歌唱する反復部からなる。このオモロでは行頭に「一」「又」と記された各行の詩句が対句部であり、「一」の部分の第2～3行の「十嶽 勝利よわちへ 見れども 飽かぬ 首里親国」が反復句である。つまり、このオモロは、聞得大君降臨のもとに行われる祭祀で国王の君臨する首里の繁栄を賞賛するために謡われたものである、と推測できるのである。「首里親国」は「親国なる首里」ということで、首里を琉球国の“親”とみて、尊称したものである。その“親国”なる首里の繁栄は「十嶽 勝利よわちへ」ということによって保証されている、つまりは、首里の優秀なるのは首里杜グスクにある「十嶽」ゆえである、と言っているのである。

首里城内の10の御嶽については『琉球国由来記』や『女官御双紙』にも記されていることであるが、このようにオモロに謡われていることは、これら近世史料を遡る古い時代から「十嶽」の信仰が確固としてあったことを知らしめる。琉球のグスクの内部にウタキのあることは『琉球国由来記』にいくつも例のあることであるが、首里グスクの「十嶽」は群を抜いている。⁽⁸⁾

(2) 王権と御嶽

ここで首里の王権と御嶽との関わりを簡単にみてみよう。沖縄島最北端の国頭辺戸村の後方（南方）には岬々たる岩山がそびえ立っているが、この岩山には三つの山巔があり、東からアフリ嶽、シチャラ嶽、ギヌクジ嶽の3ウタキがある。よく知られた話であるが、『琉球国由来記』の巻15-283項にアフリ嶽について次の話がある。

アフリ嶽 神名 カンナカノ御イベ 同（辺戸＝筆者注）村
昔、君真物出現之時、今帰仁間切アフリノハナニ冷傘立時、コバウノ嶽ニ冷傘立、又アフリ嶽ニ立ト、申伝也。
神道記ニ曰。「新神出給フ。キミテズリト申ス。出ベキ前ニ、国上之深山ニ、アフリト云物現ゼリ。其山ヲ即、アフリ岳ト云。五色鮮潔ニシテ、種々莊嚴ナリ。三ノ岳ニ三本也。大ニシテ一山ヲ覆尽ス。八九月ノ間也。唯一日ニシテ終ル。村人飛脚シテ王殿ニ奏ス。其十月ハ必出給フ也。時ニ、託女ノ装束モ、王臣モ同也。鼓ヲ拍、謳ヲウタフ。皆以、龍宮様ナリ。王宮ノ庭ヲ会所ト

ス。傘三十余ヲ立ツ。大ハ高コト七八丈、輪ハ径十尋余。小ハ一丈計」

「君真物」は、一般に琉球国最高の神とされ、国王の即位儀礼である「君手摩りの百果報事」の時や王府の大事業の竣工式などに出現するといわれる神である。聞得大君に憑依したとい⁽⁹⁾う。これが王権専有でなかったことは後述するように、久米島・石垣島・新城下地島にまで存在していることから明らかである。

ところで、この『琉球国由来記』の神「君真物」は、下に引用の形で続く『琉球神道記』では「キミテズリ」となっており、別神のようにみえるが、「キミテズリ」を神名とするのは『琉球神道記』の誤り（これについては『中山世鑑』巻1「琉球開闢之事」に「キミテズリト申スハ、天神也。」という記事も誤り）で、これは国王の即位を祝福する祭祀であ⁽¹⁰⁾った。『琉球国由来記』本文では、その君真物の出現のある時には、それに先だって今帰仁のアフリノハナ（煽り端＝御嶽名）に冷傘が立ち、次いでクボウ嶽（御嶽名）に立ち、そして、辺戸のアフリ嶽にも冷傘が立つというのである。これが『琉球神道記』では、「君手摩りという新神が出現するときには国頭の奥深い山、すなわち辺戸のアス杜にアフリ（煽り＝大傘）が出現する。その山をアフリ嶽というのであるが、その傘は五色鮮やかで、まったく荘厳そのものである。三つの御嶽に三本の傘が立つ。巨大であって、一つの山を覆いつくす。八、九月の間のことであるが、只一日で消えてしまう。（後略）」という記事であったというわけである。

二つの話に共通しているのは、君真物が出現して国王を祝福する君手摩りの百果報事の時には、国頭地方の山、特に辺戸のアス杜＝アフリ嶽に「冷傘」が立つ、という部分である。「冷傘」は『琉球神道記』に「アフリ」とあるように、オモロ以来、神の降臨の象徴として出現する傘で、その傘の淵の部分が風に吹かれ揺れるところに古代人は神霊の発動をみたと思われる。神名の「あおりやへ」もこれからきている。アフリに神性の発動をみることは、日本古代における旗・幡に対する想念と通ずるものであ⁽¹¹⁾らう。これが『琉球国由来記』の時代には中国文化の影響を受けて「冷傘」と表現されるようになったものと思われる。ともあれ、王権の継承・強化の儀礼のために君真物神が降臨する時には、沖縄島最北の、しかも琉球開闢神話で一番初めに創造された辺戸のアス森のウタキに、神々しい大アフリが立つと信じられていたのである。その時、アフリは神意の発現を示すとともにウタキを荘厳化するための装置であった。

御嶽への神の出現と祭祀がアフリと結び付けられていることはオモロにもある。一例だけを挙げる。

【オモロ例2】 卷19-1322

- | | |
|---|---|
| <p>一 きこゑ はなぐすく
あおり かず たてゝ
かぐらの げおのうちる
かに ある</p> | <p>1、聞え玻名城は
煽りを数立てて
〔カグラのゲオの内こそ
斯にあるのだ〕 = R</p> |
| <p>又 とよむ はなぐすく</p> | <p>2、鳴響む玻名城は
〈煽りを数立てて〉 R</p> |

このオモロでは、沖縄本島南部具志頭（現八重瀬町）琉名城の祭場が多数のアヲリを立てて祭祀を行っていることが語られている。そのアヲリを立てた荘厳な様は、神の世界であるオボツ・カグラのゲオの内こそがそうである、と賞賛しているのである。

王権はそのように荘厳なるウタキに降臨する神によって保証されていくのである。これを王城の中で具体的祭祀として跡付けようとすれば、首里城内の聖域中で最も重要な位置を占めていたゲオノウチ（気の内＝京の内）での儀礼に拠らなければならない。現在のところゲオノウチでの祭祀はオモロ⁽¹²⁾によって推察するしかないが、これについては拙稿「聖空間ケオノウチをめぐって」で詳しくみた。要点だけを記すと、この空間は男子禁制であるが、聞得大君や首里大君と国王が互いの視線を交わし合う儀礼（「あまこ 眼 あ 合わちへ あす 遊で / みきやう 御顔 あ 合わちへ あす 遊で」〈眼を合わせて神遊びをなさって、お顔を合わせて神遊びをなさって〉3-112）が行われた。神の出現した神聖空間に国王のみが進入を許され、そこで王権守護の霊力を受けていたというのである。

このようにウタキでの祭祀は、古琉球以来、王府を初めとして、琉球・沖縄の人々にとって重要なものとして受け止められ、連綿とその信仰が受け継がれてきたことが了解されるだろう。これを王権守護の論理のもとに編み上げていったのが、首里王府の宗教政策であり、その思想を背景に編纂されたのが『おもろさうし』や『中山世鑑』、『女官御双紙』などの文献であったとみられる。

II 『琉球国由来記』にみるウタキ

(1) ウタキの数

ウタキについての歴史的資料としては『琉球国由来記』をまず第一に挙げなくてはならないだろう。『琉球国由来記』の第5・7・8・9巻、そして第12～21巻に沖縄諸島・宮古諸島・八重山諸島のウタキが記されている。そこにどれだけのウタキが掲げられているか、そもそもそこからが問題である。仲松弥秀はこれを、902とする⁽¹³⁾。しかし、その数が「～嶽」「～森」などの名称を持ったものに限るのか、「～イベ」で示されたものまで含むのか、判断の根拠は示されていない。筆者の調査では「～イベ」の名を持つものまで含めると、929である（これには神名を持つ「嘉手志川」「浜川ウケミヅハリミヅ」「ワキリ川」「ヲシオアゲ川」などの井泉は含めていない）。いずれにせよ、900以上のウタキが王府に公認されていたことになる。

これに王府公認でないウタキが他にもあった。例えば八重山で見ると、マイチィバーオン（オン＝御嶽）・ホールザーオン・ニシトーオンなど、15世紀末から16世紀初頭に活躍して、王府の文書にもその名の残る人物達（マイチィ婆・大阿母・西塘）の墓を御嶽化したオン、クバントゥオン・イニナシオン・ウシャギオンなど八重山の稲作起源伝承に関わるタルファイとマルファイの住居跡や墓を起源とするオンも収載されていない。このように『琉球国由来記』に記載される御嶽は王府の選択の結果であったと思われるが、その選択の基準については不明である。ともあれ、これらの御嶽まで数に入れると八重山の御嶽の数は、232あることが明らかになって⁽¹⁴⁾いる。八重山の御嶽は『琉球国由来記』記載の数より156も多いわけである。さらに、宮古諸島をみても、『琉球国由来記』には29嶽しか出てこないが、『平良市史 御嶽篇』（1994年）には882嶽（サトゥガンまで含める）が上っており、実に853の御嶽が『琉球国由来記』には収載されていないことになる。このように、現在

の宮古・八重山のウタキの数は『琉球国由来記』記載の御嶽より約1000も上回っている。単純にこれを上記の『琉球国由来記』の御嶽の数に合算すると約2000となるが、さらにこれに沖縄諸島の『琉球国由来記』不掲載の御嶽を数えていくと、どれだけの数になるかまったく分からない。これだけのウタキが我々の生活空間に接して存在しているのである。まさにウタキの国琉球・沖縄であり、これだけの神に抱かれて古琉球から近代・現代まで生活を続けてきたのが沖縄人であったのである。

さて、『琉球国由来記』の御嶽の記述であるが、実はこれが一様ではなく、少なくとも三つの型がある。すなわち、①沖縄諸島の御嶽に共通の型（「沖縄諸島型」と略称）、②宮古諸島の御嶽に共通の型（「宮古諸島型」と略称）、③八重山諸島に共通の型（「八重山諸島型」と略称）である。

(2) 『琉球国由来記』の御嶽の記述形式をめぐって

① 沖縄諸島型の御嶽記述

まず、真和志間切（現那覇市）安謝村にある御嶽の例をみる。

【事例1】

ヨリアゲ森 神名 ワカマツスデマツノ御イベ 安謝村

此嶽者、昔此村ニ内間ノ大比屋ト云者有シガ、此森ニ小松三本ヲ植テ、我ガ念願叶ハセ給ハバ、可_レ崇敬トテ、田畠ヘ往キ帰ル毎ニ拜_レ之也。遂ニ此者、子孫繁栄シケル間、其ヨリ崇敬シタル由、申伝ナリ。
 (『琉球国由来記』14-83)

先ず、嶽名が「～森」と示される。「森」はオモロにもよく出る名称で、オモロでは「～たけ」（嶽）の38語形よりもはるかに多い66の「～もり」（森＝杜）の語形が出ている。勿論現在でも「クガニムイ」（黄金杜＝東村平良）、「クダマムイ」（小玉杜＝国頭村比地）などのように『琉球国由来記』の時代と同じく嶽名として用いられている。次に「神名」として同御嶽の「聖名」が「～御イベ」の名で示され、その下にこの御嶽の所在村が記される。沖縄諸島の御嶽の「神名」については、御嶽の「聖名」であるとの見解が『沖縄文化史辞典』はじめ比嘉政夫らによって示されている。⁽¹⁵⁾「聖名」は例にみるように「～御イベ」として示されるのが普通である。そして、次行以下でこの御嶽の縁由が示される。この例では、この村に住む内間の大比屋という男がこの森に松の木を3本植えて、自分の念願するところが叶えられるのであれば崇敬しようといって、畑の行き帰りごとにこの地を拜んでいた。するとその験が現れて、一家は子孫繁栄に恵まれた。それからここを御嶽として崇敬するようになった、という話である。神の出現をみたとか、現れた神の助けを得たなどの神霊の不思議に起源するのではなく、松を植え、験があるのなら崇敬するという、神との間に一種契約的な関係をおいた起源譚になっている。ともあれ、これも広義の神霊の力の発現と判断すると、この御嶽は「神霊発現型」（後述）の御嶽ということになる。

このような記述のあり方が『琉球国由来記』の「沖縄諸島型」の標準的なものといえる。

もう一つの例を見よう。浦添間切城間村にある御嶽である。

【事例 2】

古重嶽 神名 羽地コイチコイチヨウガナシ 同村
此嶽ノ神ハ羽地巫ノ骨也。彼巫那覇へ往キ、帰帆ノ時、大風逢ヒ船破損致シ、溺死ス。死骸寄揚
リタルヲ埋テ崇敬シタルトナリ。
(『琉球国由来記』14-92)

まず、嶽名が「～嶽」と示され、その下に「神名」として「羽地コイチコイチヨウガナシ」が挙げられている。この「神名」は下の縁由の「羽地巫」と関わるものであろう。次の「同村」はこの御嶽の所在地が「城間村」であることを示す。そして、次の行以下で御嶽創建の縁由が示されるのである。この縁由では、那覇から羽地に戻る航海の途中で難破し、溺死した羽地ノロの遺体が寄り揚げられたのを埋葬し、これを崇敬したところから御嶽となった、となっている。後(第四章の(1)「ウタキの種類——八重山を事例に」)に見る分類でいえば「英雄縁由地(居住地・墳墓地)型」の御嶽ということになる。

ところで、この『琉球国由来記』の記述に対し、漢文資料である『古事集』は「近処之人収其屍骨⁽¹⁶⁾尊之以為神而禱焉」と『琉球国由来記』と同意の文であるが、『遺老説伝』の67項には「其の死骨を⁽¹⁷⁾収め、之れを古重嶽(神名を羽地郡筑用加那志と曰ふ)に葬る」とあり、『琉球国旧記』も「収⁽¹⁸⁾其死骨。葬之于此嶽」と『遺老説伝』と同意の文になっている。これだと、羽地ノロの遺骸をすでに存在していた「古重嶽」に葬ったということになりそうである。漢文訳の問題なのか縁由の異伝・誤伝なのか微妙な問題であるが、もしも後二者の通りであれば、この御嶽は「英雄縁由地(居住地・墳墓地)型」からは外れることも考えられる。ともあれ、このように縁由・起源が明らかな御嶽についてはそれが記されるのである。

② 宮古諸島型の御嶽記述

【事例 3】

離御嶽 女神。離君アルズト唱(平安名村ヨリ一里ノ程東方沖ノ離ニ有)。為_レ船路_ニ崇敬仕ル。
由来。往昔、右神、ハナレ山ニ顕レ、船守ノ神トナラセタマヒタルヨシ、云伝有也。
(『琉球国由来記』20-11)

まず御嶽の名が「～嶽」の名で示され、続けて「女神」、「離君アルズト唱」とある。これはこの御嶽に祀られるのが女神であり、その名を「離れ君主^{きみあるじ}」ということが示されている。そして割注の形でこの御嶽の所在地が示され、この御嶽が「為_レ船路_ニ崇敬」されること、すなわち、この御嶽の神が航海守護神であることをいう。そして「由来」として、この神が「ハナレ山ニ顕レ、船守ノ神トナラセタマヒタルヨシ」を記す。「ハナレ山」は「東方沖ノ離ニ有」る「ハナレ島山」、すなわち地先の岩礁の樹木の茂った所をいうのであろう。ここに件の女神が現れて、自ら「船守ノ神」となって人々の航海を守護することを宣した、と述べている。

「宮古諸島型」の記述の大きな特徴は、御嶽に祀られる神の性別が明示されることであり、これは「沖繩諸島型」「八重山諸島型」にはみられないものである。宮古の29御嶽についてこれを見ると、

男神のみの御嶽が8（『琉球国由来記』の項目番号で示すと20・6・14・16・17・18・22・23・25）、女神のみの御嶽が8（同上20・1・2・3・8・11・12・19・24）、男女神二神の御嶽8（同上20・4・7・9・10・13・15・20・21）である。性別のしるされていない御嶽が5ある（同上20・5・26・27・28・29）。このうち20・5以外の御嶽は多良間島のものである。多良間島の御嶽の記述の型が他の宮古諸島のものと異なる理由には、多良間島の文化の持つ八重山的要素との近接など特異な側面と関わりがあるか）。これらからすると、宮古の御嶽信仰にあっては、その神を人格神とみる見方が顕著であり、しかも、男女対偶神となる事例もあることなど、より人間的なありようを反映しているといえそうである。また、【事例3】で「船守ノ神」と示されているように、神の性格・役割が明確に示されているのも大きな特徴である。また、御嶽の所在地は「～村」と大づかみに示されるのではなく、「平安名村ヨリ一里／程東方沖ノ離ニ有」というようにピンポイントで示されていることも他の二つの型と異なるところである（多良間・水納の両島だけは「～島」と島名が示され異なっている）。

③ 「八重山諸島型」の御嶽記述

八重山諸島の御嶽の記述についてみてみよう。

【事例4】

美崎御嶽 神名 大美崎トウハ 登野城村／御イベ名 浦掛ノ神ガナシ
右御嶽立始ル由来。昔、悪鬼納ヲ……（以下略）（『琉球国由来記』21-3）

巻21の「八重山島」の項には78の御嶽・拝所が記述されている。その記述はまず「～嶽」と御嶽の名が示され、「神名」として御嶽の聖名が挙げられる。ついで「～村」と御嶽の所在する村の名が示される。ここまでは、「沖縄諸島型」と同じである。しかし、「八重山諸島型」ではその後に「御イベ名」という細目があって、【事例4】に「浦掛ノ神ガナシ」（浦＝湊を支配する神様）という神の名が示されているように、「～アルジ・～大アルジ」（～主・大主）など人格神を思わせる例のように、神の名前が挙げられる。そしてその後に御嶽の縁由が記されていくのである。

(3) 御嶽祭祀の司祭者

ここで、御嶽における祭祀の司祭者についての記述をみてみよう。祭祀の執行に当たっては、当然これを司祭する存在が必要である。沖縄諸島ではノロ（ヌル）、宮古・八重山ではツカサ（チカサ＝司）と呼ばれる女性神役が担うことは、すでに周知のことである。その女性神役（神女）には、ノロ・ツカサの下にワカノロ（ワカヌル＝若ノロ）・ネガミ（ニーガン＝根神）・ウッチガン（掟神）などがいる。それが、例えば大宜味村塩屋のウングミ（海神祭）の際の田港村の神アサギでの祭祀には、ノロを中心に若ノロ・大勢頭が右と左に、さらにその脇に田港・白浜・塩屋の3人の根神が、そして後方の座にはアシビ（遊び）神3人と前ビー（前坐り神）6人、その後方右側に勢頭神1人、島方1人、左側に勢頭神5人が着座して神への祈願を捧げる。宮古の平良西原ではウーンマ（大母＝大司）を頂点にその下に、アグシャー（アグを謡う神女）・ナカバイ（中栄え＝中の司）・ウーンマヌトゥム（大司の伴役）・アグシャーガトゥム（アグシャーの伴役）があり、その下に各戸の主

婦によるナナムイヌマ（七杜の母役）がいる。八重山石垣島登野城のミシャギオン（美崎御嶽）ではホールザー（八重山大阿母）を上役として、その下にイラピンガニ・キライ・シドー（勢頭）・ブンナー・アンシサリ（阿母シラレ）・サジヌアン（佐事の阿母）とウキディヌアン（受け手の阿母）がいた。竹富島では最高位にフーチカサ（大司）、その下にシンヌチカサ（次の司）・カングナジィ（神女頭）またはバシチカサ（協司）、さらにその下にカンヌファー（神の子）・スディヌファー（袖の子）、そしてニガイピトッ（願い人）がいるという組織であった。⁽¹⁹⁾しかし、社会の変化でこのような祭祀組織は次第に衰退し、現在はノロなどの上位の神役さえ存在しない村・御嶽が存在しているのも事実である。

さて、その祭祀の司祭役について『琉球国由来記』はどのように記述しているかということ、次のような具合である。

【事例5】

座安ノ嶽 神名 マシラゴノ御イベ 座安村
 渡嘉敷ノ嶽 神名 マシラゴノ御イベ 渡嘉敷村
 右式ヶ所、座安巫崇所 (『琉球国由来記』12-93・94)

豊見城間切の座安村と渡嘉敷村の二つの御嶽は座安ノロの「崇所」（神への祈願所）である、すなわち、この両御嶽での祭祀は座安ノロが司祭する、ということが記されているわけである。

『琉球国由来記』の御嶽の司祭者についての記述はこのように簡単なものである。特定の祭祀の場合は「間切中、巫・掟アム・位衆・サバクリ中相揃、御崇仕。鍋ニ潮汲、大アスメニカケ、保栄茂ノロ、鍋戴キ、七廻タリテ、雨乞仕也」（『琉球国由来記』12-84）というように、祭祀に参加する神女と、その祭祀における神女の儀礼的行為まで記すことがある。

【事例6】

上門根所
 稲大祭之時、神酒壺（久場村／百姓中）供之。大城巫ニテ祭祀也。且此時、百姓中、五組盆三通相調、巫・若巫・掟アム三人、馳走也。(『琉球国由来記』14-219)

これは『琉球国由来記』の各間切（行政区画の一つ。市・町・村に相当する）の「年中祭祀」の項の記述の一例である。稲の豊穰感謝祭である「稲の大祭」のとき、村人（「百姓中」）からの献饌を「巫・若巫・掟アム」の3人が受けることが記されている。「巫・若巫・掟アム」はそれぞれヌル（ノロ）・ワカヌル（若ノロ）・ウッチアン（掟阿母）のことである。

これらの事例から、ノロを中心に若ノロ・掟アモ・ネガミ（根神）などの神女が村の祭祀組織の中核を構成し、御嶽での祭祀はじめ村の年中祭祀を執行していたことが推測される。

なお、『琉球国由来記』の宮古・八重山の御嶽記事には司祭者の名は出てこない。これは、『琉球国由来記』の記載形式の問題であることは言うを俟たないことだと思われる。⁽²⁰⁾

Ⅲ 御嶽の神の名前（神名）をめぐって

(1) ウタキの神

さて、ウタキに祀られる神とはいったいどのような姿形をしているものか。男か女か。その形は人間のような格好をしているものか。そもそも目に見えるものなのか。そして、どのような性格・働きを持った存在であろうか。このようなことが詳しく解明されないと、沖縄のウタキ信仰の根本には迫れないはずである。

これらの問題のうちウタキの神の役割・機能について、仲松弥秀はウタキの神を分類して、①村を愛護する祖霊神・島立神・島守神、②祝福をもたらすニライ・カナイの神、③航海守護神の3種と⁽²¹⁾した。牧野清は八重山のオンの神を上記の仲松弥秀のとりだした神の他、④水元の神、⑤火の神、⑥⁽²²⁾豊漁の神、⑦牛馬の繁昌を司る神のあることを指摘した。

さて、これらの御嶽の神を大きく纏め直すと、a. 豊饒をもたらし村落の平安を守護する神、b. 農業神（豊年・豊作の神。水元の神。牛馬繁昌の神。鍛冶の神）、c. 海神（豊漁の神。航海安全の神。船元の神）、となるだろう。

前章で御嶽の神の名前の記述について簡単に触れた。御嶽の神には名前がある。宮古の神歌には「カンナーギ」（神名挙げ）という、祈願を捧げる神の名前を一つ一つ列挙していく形式があるように（八重山にもニガイフチの中にその例がある）、島のウタキや岳・岬にはそれぞれ名を持った神が^{おわ}坐す。しかし、御嶽の神の名前（神名）についてこれを分析的に検討した研究はあまりない。そもそも、私自身の経験では神名を聞き出すことがまず不可能であって、これを研究テーマとする準備が整えられなかった。結局、目下のところ、神名の研究は文献に拠らざるを得ない。ここで『琉球国由来記』に「イベ名」として記載された八重山のオンの神名を例として、その実態と語義について検討してみよう。これは先にも書いたように、御嶽の神の役割・機能を考えるための作業の一つでもある。

(2) オンの神名の実際

ここで八重山の御嶽の神の名（「御イベ名」）をみてみると、大まかに、接尾語を持つ神名と持たない神名の二つのグループに分けられる。

前者の接尾語には「～大主・～本主・～アルジ」（以下「アルジ系」と称す）、「～大神・～神」（以下「神系」と称する）、「～カナシ」・「～アジ」（按司か）・「～トノ」（殿か）・「～ヲヤン」（大親か）、がある。これらの接尾語のうち、「アルジ」「神・大神」「カナシ」「ヲヤン」は性別は不明である。「アジ」「トノ」については男性が考えられるかも知れない。

接尾語の付く神名を持つ御嶽は全部で33ある。その内訳は「アルジ系」が22例で最大のグループとなっている。この「アルジ系」の神名を具体的にみてみよう。「水瀬大アルジ」（21-6 水瀬御嶽。以下『琉球国由来記』の巻数を示す「21」と「御嶽」の二字は省略）、「袖タレ大アルジ」（8 崎枝・39 波レ若）、「ナリ大アルジ」（18 嘉手苺）、「マカコ大アルジ」（22 赤イロ目宮島・43 サクヒ）、「ナアナ大アルジ」（23 山川）、「シロキ大アルジ」（24 稲ホシ）、「ゲライ大アルジ」（25 浜崎）、「友利大アルジ」（26 シコゼ・37 久間原）、「マシロ大アルジ」（27 ネハラ）、「ハルケ大アルジ」（29 イテホタ）、「ハタト大アルジ」（34 波座真）、「モチヤイ大アルジ」（36 幸本）、「マスキャ大アルジ」（53 上地

美)、「カメヤマ大アルジ」(57 カメ山)、「ヲレミカイ大アルジ」(58 崎枝)、「慶田底神ヲレノ袖タレ大主」(62 与那良)、「ハイツタリ根タメ大アルジ」(74 アミ取)、「アマイラ本主」(4 天川)、「オモトアルジ」(5 名蔵)の22の御嶽の神名である。この中には「袖タレ大アルジ」「マカコ大アルジ」「友利大アルジ」のように二つの御嶽の神の名となっているものがある(「袖タレ大アルジ」については62まで加えると3御嶽となる)。これらの御嶽の神が全く同一の神であるか、「同名異神」の異なる神かは分からない。また、22・23・24・25・26の御嶽は石垣島川平の御嶽、27・29は同じく仲筋・桴海の御嶽であり、これらが一つの「マユンガナシ文化圏」⁽²³⁾の村であることからすると、これらの地域に神名の命名について共通の発想——あるいは神に対する共通の想念があったかもしれない。なお、「袖タレ大アルジ」の「袖タレ」(袖垂れ)は、靈妙なる神力の十全の発現状態の表現とみられる。これについては別稿で論じたことがある⁽²⁴⁾。

「～大神・～神」が付く神名には「サタイ主大神」(45 迎里)、「エラビヲタイ大神」(46 ハイフタ・47 フカイ)、ヲトウソイ大神(48 ハイカメマ)、「渡り神通り神」(67 多柄)、「ワタリ神通ヒ神」(70 離)、「ヲタイガネマセド神」(75 ヲハタケ根所)の7例がある。

これらの中で注目されるのは「～大神」の名を持つのはいずれも黒島の御嶽であること、「～神」の名を持つのは西表西部地域の御嶽ということである。そしてこれらの接尾語が神を莊嚴化するためのものであることは、46・47の「エラビヲタイ大神」の「エラビヲタへ」のみで神名となっている「イラビヲタへ」(52 喜屋武)があることから分かる。

「～カナシ」は【事例4】の1例、「～アジ」の例は「ミサキアジサカイアジ」(69 西美崎)の1例、「～トノ」の例は「ニシセルコヒヤノトノ」(76 真徳利)の1例、「～ヲヤン」の例は「ヲタイシカイヲヤン」(78 阿幸俣)の1例である。

次に接尾語無しのグループをみよう。これには44の御嶽の神名が該当する。煩瑣ではあるが、これを全て挙げてみる。「豊見タトライ」(1 宮鳥)、「スキヤアガリ」(2 長崎)、「ミモノトモソイ」(7 白石)、「イベ(へ)スシヤカワスシヤ」(9 糸数・38 花城)、「月ノマンカワラ」(10 ヲホ)、「ケンサウジムカノアジ」(11 ヲノミチ)、「モトノキンキサノキン」(12 大城)、「月ノマシラへ」(13 コルセ)、「フシカウカリ」(14 崎原)、「照月ケンナフ」(15 仲嵩)、「玉置カワスシヤ」(16 山崎)、「照月キンナフ」(17 外本)、「ミヤライシ」(19 真和謝)、「大ヒルカメヒル」(20 多原)、「ヲタウハツフンセハツ」(21 仲夢)、「ネツハイモト」(28 与那間)、「ヲラフムンサケ」(30 ネハラ)、「トンカイヨセソイ」(31 野城)、「キシノヨセ玉ノヨセ」(32 半嵩)、「テンツギテンガネ」(33 徳底)、「イヘスシヤ」(35 仲筋)、「ナイセルコフンハコ」(41 テダクシ)、「モモキヤネ」(42 仲山)、「根根春神本」(44 東)、「モモケヲタへ」(49 保里・50 仲盛)、「玉知イラビ」(51 西神山)、「イラビヲタへ」(52 喜屋武)、「カイ盛カイサキ」(54 下地東)、「キンマモノ」(55 下地西)、「マイヒキウモイ」(56 三離)、「ニタメヲホソイ」(59 シタツ)、「ヲホトウノシ」(60 ヲカ)、「ヨライシソ玉」(61 小離)、「大ザナルガネ」(63 友利)、「イリキヤニ」(64 ヒナイ)、「大アシシヤ小アシシヤ」(65 西泊大)、「トリツキトヒカイ」(66 干立)、「ハタチャハツ」(68 浦内)、「イヘシヤ小アシシヤ」(71 前泊)、「成ヤ原三離原」(72 成屋)、「泊白玉マヘヒキ」(73 船浮)、「キヤウモンカイモン」(77 白郎原)である。

これらの中で目を引くのは、「イベスシヤカワスシヤ」が9糸数・38花城の2御嶽の神名となっていること、これをもっと細かくみると、「イヘスシヤ」のみの形が35仲筋、「イヘシヤ」という形で

はあるが、これが71 前泊に出ていて、この語が神名として汎用性があったらしいことがうかがえる。また、「照月ケンナフ」(15 仲嵩)と「照月キンナフ」(17 外本)は「キンナフ」と「ケンナフ」と表記は異なっているが、これもまた同一の神名であること。しかも仲嵩御嶽と外本御嶽は石垣島宮良の御嶽であり、これは同一の神名とみてよいだろう。また、「大アシシヤ小アシシヤ」(65 西泊大)と「イヘシヤ小アシシヤ」(71 前泊)は異なった名前であるが、「小アシシヤ」の部分が重なっている。「大アシシヤ」「小アシシヤ」からすると「アシシヤ」の部分が語義の実体であることは明らかであるが、今は不明である。さらに「大アシシヤ」と「イヘシヤ」の「シヤ」が重なっていることも何らかの関わりがあろうか。なお、60 小離の「ヲホトウノシ」は「大渡主」なら、接尾語「ぬし」(主)の例、63 友利の「大ザナルガネ」の「ガネ」が「金」なら、これも接尾語「かね」の例となる。

最後に神名のない「御嶽」がある。これは竹富島の「国仲根所」(40)で、「神名ナシ、御イベナシ。ソノヒヤブノ御神勸請也。」とある特殊な事例である。首里のスヌヒャンウタキ(園比屋武御嶽)の神を勸請して建てたもので、西塘の誓願による勸請であることが縁由として記述されている。

(3) オンの神名の語義について

以上、オンの神名の実際をみた。接尾語の付く神名、付かない神名と二つがあるが、その神名の語義についてはほとんどがよくは分からない。語義が明らかになれば、その神の役割・機能についてもその名称から推測ができるであろう。その意味で、神名の語義の分析・理解は大切な課題である。これらの神名の構成要素となっている語をみてみると、『おもろさうし』や沖縄諸島・宮古諸島の神歌などに出る古語との関わりが指摘できるものが幾つかある。以下、これらの語について取り上げ、現段階での理解を示しておきたい。なお、接尾語の付く神名は、その接尾語をはずした形で考えるが、説明のために付けたままで掲げたものもある。

1) 語義の説明のできる神名

A 語義の全体が説明でき、神の役割・機能が分かる神名

- ・浦掛ノ神ガナシ (21-3. 御嶽名は省略。以下では巻番号の21も略) = 湊を支配するの意。美崎御嶽の神の名としては最適の名。
- ・渡り神通り神 (67) / ワタリ神通ヒ神 (70) = 岬や海峡を船が航行(渡り・通う)するのを守る神。
- ・ミサキアジサカイアジ (69) = 「岬按司・境按司」の意であろうか。西表の「西美崎御嶽」の神名で、この地の先を航行する船の安全を守る神か。

B 語義の全体は説明できるが、神の役割・機能が分からない神名

B-1 地名が神名となったもの

- ・オモト大アルジ (5) = オモト山に鎮座する神。
- ・水瀬大アルジ (6) = 名蔵水瀬の神。
- ・友利大アルジ (26・37) = 友利は地名とみられる。
- ・カメ山大アルジ (57) = 「カメ山」は黒島の地名とみられる。
- ・慶田底神ヲレノ袖タレ大主 (62) = 「慶田底」は西表古見の地名。祖納の慶来慶田城げらいけ だくすくが造船をしたと伝えられる地。

- 成ヤ原三離原 (72) = 「成ヤ原 / 三離原」と区切れるだろう。いずれも成屋村の地名とみられる。「三離」の地名(御嶽名)は西表古見にもある。

B-2 神の動作・行為を表す語が構成要素となっている神名

- 慶田底神ヲレノ袖タレ大主 (62) = 「神ヲレ」は神降り、神の降臨をいう。「袖タレ」は袖を垂れている状態を表す語。神霊の十全なる発現状態をいう。

C 語義の一部は分かるが、役割・機能は不明な神名

C-1 語義の一部が琉球古語で説明ができる神名

- 袖タレ大アルジ (8・39・62) = 上記参照。
- ゲライ大アルジ (25) = 立派な大主。「ゲライ」はオモロ語などの「げらへ」と同語。
- 豊見タトライ (1) = 名高いタトライ。「豊見」はオモロ語「とよむ」(鳴響む)の連用形が美称辞となったもの。「タトライ」は神の固有名か。
- スキヤアガリ (2) = スキヤ揚がり。「アガリ」はオモロ語にも「うきあがり」(浮き揚がり。船の美称)、「なりあがり」(鳴り揚がり。鼓の美称)と出る。「スキヤ」の語義は不明。
- ミモノトモソイ (7) = 見物なるトモソイ。立派なトモソイ。「ミモノ」はオモロ語「みものあすび」(見物なる遊び。立派な神遊び)、「みものきみ」(見物なる君。立派な君神)、「みものすゞなり」(見物なる鈴鳴り。船の美称)、「みものともかい」(見物なるトモカイ。人名)など接頭美称辞として使われている。「トモソイ」の「ソイ」は「襲う」あるいは「添う」の連用形が接尾語となったものか。31に「ヨセソイ」(寄せ襲い?)、59に「ヲホソイ」(大襲い?)と出る。
- イベ (へ) スシヤカワスシヤ (9・38) = 「イベスシヤ / カワスシヤ」と区切れる。直訳は「神の神霊・日神の神霊」となるか。「イベ」はオモロ語の「いべ」(「いべの いのり」= イベの祈り。対語は「つかさ祈り」= 司祈り。7-367・12-741など)と同語で、折口信夫が「女の香炉⁽²⁵⁾」で説くように神霊の意であろう。その対語の「カワ」もオモロ語に「てるかわ」(照るカワ。日神)と出る「かわ」と同語とみられる。「スシヤ」ははっきりしないが、これまたオモロ語の「すぢや」と重なると思われる。現在、オモロ語の「すぢや」は「下界の人間。天上の神や天女に対する、世の人、人々、の意⁽²⁶⁾」とされる。しかし、これは『混効験集』などの語釈に基づくもので、オモロの用例にある「かみ すぢや そろて / ほこりよわちへ」(神・すぢやが揃ってお慶びになって。5-237)、古謡の「神 ないそ あとおるて / すじや なくそ 揃て / あすばしゆす / おどらしゆす」(神の七十が集まって、すじやの七十が揃って、遊ばせること、踊らせること。オタカベ2)などの「すじや」は、人間と訳されているが、あるいは、神の対語としての「神霊」を考える事もできよう。特に後者の用例にある「あすばしゆす」(遊ばす)は、オモロなどでは神遊びをいう語であることから、その可能性はある。また、創成神話を謡ったオモロ 10-512の末尾の「又 あまみやすぢや なすな / 又 しねりやすぢや なすな / 又 しやりば すぢや なしよわれ」の解釈については諸説⁽²⁷⁾あるが、これもこの「イベスシヤカワスシヤ」の解釈を参考に考えるべきかも知れない。少なくとも、この「イベスシヤカワスシヤ」の「スシヤ」は、「衆生」で「下界の人間」であろうはずはない。この「スシヤ」とオモロ語などの「すぢや・すじや」とが重なる可能性は一考に価するだろう。なお、「イベスシヤ」(35)のみの例もある。
- 月ノマンカワラ (10)・月ノマシラへ (13) = 確証はないが、「月ノ」の「月」は天体の「月」を言

うか。この2例は語構成的に同じであるから、「月」は同語として解釈すべきだろう。15・17の「照月ケ（キ）ンナフ」の「照月」も「月」か。前の「照」は「照る」だろう。オモロに「てるかは」（太陽）、「てるしの」（太陽）などがある。すると「月」は「月」の可能性が高くなる。なお、「マンカワラ」（10）、「マシラヘ」（13）は不明であるが名前か。「マシラヘ」が「マシラベ」と濁音であれば、宮古のマッサビの事例もあるから、⁽²⁸⁾「マシラヘ」は女性名である可能性はないだろうか。あるいはオモロの「しらへきよ」（シラヘ子）（14-984）の「しらへ」が「しらべ」であれば、神的存在の名である可能性も考えられる。このことから語構成の同じ「マンカワラ」も名前ということができよう。また、「マンカワラ」の「カワラ」は「ヲヤケアカハチ・ホンカワラ」（『琉球国由来記』21-3、『球陽』160項の「遠弥計赤蜂保武川」）、「西カワラ・東カワラ」（『琉球国由来記』21-20）の例にみるような、古い時代の首長を表す語かも知れない。すると「マン」はその「カワラ」を修飾する語で、「真の」などが考えられるか。

- モトノキンキサノキン（12）＝「モトノ／キサノ」は「元の／昔の」の意だろう。「キサ」はオモロ語の「むか／むかし」（昔）の対語「けさ／けさし」と同語。「キン」は不明。「君」か。
- 照月ケ（キ）ンナフ（15・17）＝「照月」は「照る月」か。「ケ（キ）ンナフ」は不明だが名前か。上の「モトノキンキサノキン」の「キン」と関わる可能性もあるか。
- 玉置カワスシャ（16）＝「玉置」は「玉を置く」の意か。石垣島の地名に「たまとり」（玉取り。玉取崎）があるが、「たま」が「玉」なら、このように「おき」（置き）・「とり」（取り）という動詞連用形が続く地名・美称などがあつたか。32に「玉ノヨセ」があるが、これも「玉の寄せ」か。オモロ語に「たまよせおうね」（玉寄せ御船）、「玉よせぐすく」（玉寄せグスク）がある。「カワスシャ」は9で既述。
- キシノヨセタマノヨセ（32）＝「キシノヨセ／タマノヨセ」と区切れるか。石垣島伊原間の半嵩御嶽の神の名であることから、「キシ」は「岸ヌラ（岸ヌ浦）」（「月夜浜節」⁽²⁹⁾）の「岸」か。キシヌラは伊原間の南方に聳える金武岳の南麓の地名。「タマノヨセ」は「玉の寄せ」か。上記の「玉置カワスシャ」で述べた「たまとり」はその東方海岸にある岬であるから、あるいは「タマヨセ」は「たまとり」岬と関わるか。半嵩御嶽は元「金武岳の北の半嵩むる」に浮海村から移ってきた人々が開いた半嵩村の御嶽であつた。⁽³⁰⁾位置的には「月夜浜節」の「キシヌラ」と近接している。
- テンツギテンガネ（33）＝「テンツギ／テンガネ」と区切れる。「テンツギ」はオモロ語などに出る「てにつぎ・天つぎ」（天継ぎ。天を継ぐこと。尚清王の神号ともなった）と同じ語。「てんがね」は「天がね」で、天を支配するの意を表す語とみられる。「かね」はオモロ語の動詞「かねる」（支配する。統べる。守護する。「しま かねる みたま」＝島を支配・守護する御玉。オモロ 12-692）の連用形だろう。
- 根根春神本（44）＝漢字のみで記された珍しい例。根なる春の神本の意。「春」が「原」なら「村」の意となり、「根根なる村の本神様」という意か。また、「根根」が正しい表記かも知れぬべきだろうか。
- エ（イ）ラビラタイ（ヘ）（46・47・52）＝選ばれたヲタイ（ヘ）。優れたオタイ（ヘ）。「エ（イ）ラビ」は「選び」で美称辞と考えられる。イラビンガニ（「永良比金」＝『球陽』160項）のイラビも本来はこの「選び」か。「ヲタヘ」は語義不明だが、名前だろうか。

- カイモリカイサキ (54) = 「カイモリ／カイサキ」と区切れる。「カイ」は美しいの意か。「モリ／サキ」は杜・崎だろう。
- キンマモノ (55) = 君真物。琉球国最高の神とされるキンマモンと同名。オモト嶽の神もキンマモンであり、前述の久高島の御嶽の起源伝承に現れたのも「君真物」であり、久米島伊敷索グスクで行われた伊敷索按司の祭儀に現れた神も「キミマモノ・君マモノ」(『琉球国由来記』19-1a・58)であった。この神の名が遠く八重山の小島である新城の下地島まで伝わっていたのである。
- 大ザナルガネ (63) = 「大座鳴る^{かね}金」か。「ガネ」は接尾敬称辞(「金」から)の可能性もある。厳密には不明。
- 泊白玉マヘヒキ (73) = 厳密には不明であるが、「泊白玉前引き」か。「泊」は船浮村の湊に関わるか。「マヘヒキ」はこれに因んで村の前の湊に引き寄せるの意かとみた。

C-2 語義は不明だが、美称(?)の語句が冒頭に来ている神名

- アマイラ本主 (4) = 「アマイラ」の語義不明。美称辞か。
- ナリ大アルジ (18) = 「ナリ」の語義不明。美称辞か。
- マカコ大アルジ (22・43) = 「マカコ」の語義不明。美称辞か。
- ナアナ大アルジ (23) = 「ナアナ」の語義不明。美称辞か。
- シロキ大アルジ (24) = 「シロキ」の語義不明。「シロ」は白で、美称辞か。
- マシロ大アルジ (27) = 「マシロ」の語義不明。「真白」で、美称辞か。
- ハルケ大アルジ (29) = 「ハルケ」の語義不明。美称辞か。
- ハタト大アルジ (34) = 「ハタト」の語義不明。美称辞か。
- モチヤイ大アルジ (36) = 「モチヤイ」の語義不明。「持ち有り」で、美称辞か。
- サタイ主大神 (45) = 「サタイ」の語義不明。
- マスキヤ大アルジ (53) = 「マスキヤ」の語義不明。美称辞か。
- フレミカイ大アルジ (58) = 「フレミカイ」の語義不明。美称辞か。「カイ」は美しいの意を表す八重山語の形容詞カイシヤンの語幹か。
- ハイツタリ根タメ大アルジ (74) = 「ハイツタリ根タメ」の語義不明。「ハイツタリ／根タメ」と二語より成るか。いずれも語義不明。全体で美称辞か。

これらの神名がいずれも「大アルジ」「大神」「主」などの尊称の接尾語を持つものであることは注意しておいてよいと思われる。

2) 語義のほとんどが不明の神名

- ケンサウジムカノアジ (11) = 「ケンサウジ」は不明。「ムカノアジ」は「昔の按司」か。
- フシカウカリ (14) = 不明。
- ミヤライシ (19) = 不明。「ミヤラ」は地名で石垣島の宮良か。「イシ」は石か。
- 大ヒルカメヒル (20) = 不明。「大ヒル／カメヒル」か。すると、「カメ」は「大」に対応する接頭辞(美称辞)で、「戴^かめ」「戴く」の意を表す八重山語のカミン・カミルンの語幹)か。「ヒル」は不明。
- ラタウハツフンセハツ (21) = 不明。「ラタウハツ／フンセハツ」か。そうだとすると、共通部分は

「ハツ」となる。68の「ハタチャハツ」の「ハツ」も同じか。「ハツ」は名蔵・白石・水瀬御嶽の起源神話に語られる乱暴者ハツガネ（『琉球国由来記』21-7）の「ハツ」か。あるいはオヤケアカハチのハチとも関わるか。「ヲタウ／フンセ」も不明。

- ネットハイモト (28) = 不明。「モト」は元・本か。
- ヲラフムンサケ (30) = 不明。
- トンカイヨセソイ (31) = 不明。「ヨセソイ」は「寄せ襲い（添い）」か。
- ナイセルコフンハコ (41) = 不明。
- モモキヤネ (42) = 不明。
- モモケヲタへ (49・50) = 不明。いずれも黒島の御嶽の神の名。「ヲタへ」の名は46・47に「エラビヲタイ」、52に「イラビヲタへ」の形で出る。他にも75「ヲタイガネマセド神」、78「ヲタイシカイヲヤン」がある。「エ（イ）ラビ」は「選^び」で美称辞と考えられる。これから「モモケヲタへ」は「モモケ」と「ヲタへ」から成り、「モモケ」は「エ（イ）ラビ」と同様「ヲタへ」を修飾する語と考えられる。「モモケ」は不明語であるが、例えば琉歌に「惜しむ夜やふけて 明雲や立ちゆりにやまたいつ⁽³¹⁾ 揮で 百気のびゆが」（『琉歌全集』424 番歌。〈惜しむ夜は更けて、はや夜明けの雲が立っている。また、何時の日にお会いして私は命を延ばすことができるでしょうか〉）とある「百気」（ももき）と同語とみることはできないだろうか。すなわち「モモキヲタへ」で、「命なるヲタへ。生命力有るヲタへ」のような神名が考えられないかということである。
- マイヒキヒウモイ (56) = 不明。「モイ」は「思い」の意で、接尾語か。
- ニタメヲホソイ (59) = 不明。「ヲホソイ」は「大襲い（添い）」か。
- ヲホトウノシ (60) = 不明。「ヲホ」は「大」か。「トウノシ」の語義不明。あるいは、「渡主^{とぬし}」（航路の神）の表記か。「ヲカ御嶽」の前の海は古見村への出入りの湊であり、プーリィ（豊年祭）の船漕ぎもこの海で行われる。これらから、「ヲホトウノシ」は「大渡主」で、湊と諸船の航海を守護する神である可能性はある。
- ヲライシソ玉 (61) = 不明。「玉」は文字通り「玉」でよいか。「ヨライシソ」の「ヨライ」は「寄り合い」の意か。「シソ」は不明。
- イリキヤニ (64) = 不明。「イリキヤ・ニ」と区切れるか。もしそうなら「イリキヤ」は「イリキヤアマリ⁽³²⁾」の「イリキヤ」と同語か。
- 大アシシヤ小アシシヤ (65) = 不明。71の「イヘシヤ小アシシヤ」にも「小アシシヤ」は出る。「大・小」は接頭語だから、名前の実体は「アシシヤ」にあるが、その意は不明。
- トリツキトヒカイ (66) = 不明。「トリツキ／トヒカイ」と区切れるか。そうであれば、「トリツキ」は「鳥付き」・「取り付き」などが考えられるか。「トヒカイ」は不明。
- ハタチャハツ (68) = 不明。「ハツ」は前記（「ヲタウハツフンセハツ」(21)）のように「ハツガネ」の「ハツ」、オヤケアカハチの「ハチ」と重なるか。「ハタチャ」は不明。
- イヘシヤ小アシシヤ (71) = 不明。前記「大アシシヤ小アシシヤ」(65) 参照。「イヘシヤ」の「イヘ」は「大アシシヤ」の「大」に対応するか。もしそうなら「シヤ」は「アシシヤ」の「アシ」の誤脱か。あるいは逆に「イヘ」だけで「大アシ」に対応することも考えられるが、不明。さらに、「イヘスシヤ」の「ス」の脱落も考えられるか。

- キヤウモンカイモン (77) = 不明。「キヤウモン／カイモン」と区切れるだろう。すると「モン」が共通の語となる。「キヤウ」・「カイ」は不明だが、「カイ」は美しいの意か。もしそうだとすると、「キヤウ」はオモロ語の「きやうのうち」(京の内。15-1062)、「きやうのよいこせ」(京のよいこせ。9-494)の「きやう」と重なるか。なお、「京」は『おもしろさうし』では一般に「きや」と書かれるが、上記の二例は特例とみることになる。「モン」は不明。

(4) 小括

ここでは『琉球国由来記』記載の八重山のオン(御嶽)の神名の全てについて、その語義の解明をめざして、分析的に取り上げた。全体として語義の不明なものについても、その構成要素を取り出し、可能な限り追求してみた。その結果は、語義の明らかな事例は少なく、それに分類されるのは21-3石垣島登野城「美崎御嶽」の「浦掛ノ神ガナシ」、67西表島上原「多柄御嶽」と70西表内離島「離御嶽」の「渡り神通り神」・「ワタリ神通ヒ神」、69西表島西表「西美崎御嶽」の「ミサキアジサカイアジ」の3例のみである。これらはいずれも湊を守り、岬のまわりの海や海峡を往来する船の航海安全を守護する役割が、そのまま神名となったものである。これら以外については、神名の語義は説明できても、役割・機能に言及できる例はない。神の讚美表現(例えば「豊見〜」)やその形姿についての表現(例えば「袖垂レ〜」)ということはいえるが、それ以外のことは神名からは分からないのである。接頭語や接尾語を除き、神名の実体をなす語を突き止め、その語義を検討したが、ほとんどはまだ推測の域を出ない。しかし、オモロ語など、琉球古語がそこに現れていることは指摘できるように思う。55新城下地島「下地西御嶽」の「キンマモノ」(君真物)であるとか、8石垣島「崎枝御嶽」・39竹富島「波レ若御嶽」・62西表島古見「与那良御嶽」の「袖タレ大主」はオモロ語そのものである。『琉球国由来記』17-25には渡名喜島鳥島の御嶽に「ソデタレ御嶽」があることも記しておこう。その他、9石垣島真栄里「糸数御嶽」・38竹富島「花城御嶽」の「イヘスシヤカワスシヤ」(35竹富島「仲筋御嶽」は「イヘスシヤ」のみ)の「イヘ・カワ」「スシヤ」もオモロ語の「いべ」「かわ」「すぢや」と重なる語の可能性がある。また、「ハツ」の語を持つ神名が21石垣島仲与銘村「仲夢御嶽」など幾つかあるが、これは石垣島名蔵の三御嶽の起源神話で語られる「ハツガネ」の「ハツ」、あるいは15世紀末の八重山の土豪オヤケアカハチの「ハチ」などと重なるものかもしれない。同様の事例は10石垣島平得「ヲホ御嶽」の「月ノマンカラ」の「カラ」もそうで、これらは古琉球期の八重山の人名などとの重なりを思わせる。このように、オモロ語などの琉球古語や八重山独自の古語との重なりを推測させる語が多数指摘できる。

しかし、一方では語義のほとんど分からない神名もかなりあり、これらの解明が俟たれる。これは地域における伝承を丁寧に追っていくことなどである程度は解明されるかも知れない。八重山・沖縄の神の性格を考える上で、今後果たさなければならない課題である。

IV ウタキの種類と構造

(1) ウタキの種類——八重山を事例に

さて、ここでウタキの種類について概観しよう。琉球・沖縄全体を俯瞰することはできないので、

八重山のオンを事例に考える。

まず、オンを分類するにはいくつも切り口がある。以下、考えられる分類基準に基づいて分類してみよう。まず、1) オンの管理・管轄者による分類がある。すなわち、公儀（王府・八重山蔵元など）が管理するか、村が管理するか、特定の家筋が管理するかによって公儀のオン（公儀オン）、村のオン（村オン）、私的オンの三つに分類される。次いで、2) オンの性格による分類ができる。すなわち、本来のオンであるか、遥拝などの為に作られたオンであるか、あるいは分祀によるオンであるかという分類である。これについては、本オン・お通しオン、また、元オンと子オン、波照間島にみられるピテヌワー（野原のオン）とムラウチヌワー（村内のオン）という分類ができる。また、住民の移住などによって母村の御嶽の神を分祀する分祀オンについては石垣島白保の波照間御嶽（波照間島の阿底御嶽からの分祀）、石垣島宮良の小浜御嶽（小浜島の御嶽からの分祀）などがある。そして、三つ目に3) オンの起源・創設の型による分類がある。これは前記の牧野清の縁起による分類などがそうであるが、これも大きく纏め直すと、a. 神霊発現型のオン、b. 英雄縁由地（居住地・墳墓地）型のオンに分けられる。a. 神霊発現型というのは、オンの由来・起源に神霊が大きく関わるものである。神出現の地や人々が神の不思議をみてその地をオンとしたもので、八重山のオンの大部分がこれに分類される。b. 英雄縁由地（居住地・墳墓地）型は、『琉球国由来記』が記載しなかったオンの例として掲げたクバントゥオン、ウシャギオン、イヤナシオン、マイチバーオン、ホールザーオン、ニシトオンなど、文化英雄や伝説的人物の居住地や墳墓をオンとしたものである。なお、これらの事柄については先に「八重山の御嶽信仰習俗」⁽³³⁾で述べた。ご参照いただきたい。

この八重山のオンで試みた分類は、沖縄のウタキの場合にも有効だと思われる。このような観点からの全沖縄のウタキの分類・整理は試みる価値のある課題だと思う。

(2) 沖縄のウタキの構造

1) 沖縄諸島のウタキの構造

ウタキは沖縄各地の山野、あるいは集落の周辺、さらには集落内に存在することもある。集落内の御嶽が古くから現状のとおりであったかは、集落の拡大などによってその位置が集落の内部となるなど、時代の推移による変化などが考えられねばならない。これらのウタキがどのような形態をとって存在しているか、これについてその概略を述べてみよう。

言うまでもないことではあるが、沖縄のウタキが『琉球国由来記』の時代の姿を保持してきた、とすることはできないことであろう。近世期の沖縄のウタキについての絵図資料等は極めて少ない。例えば、鎌倉芳太郎収集資料の『図帳／当方』（成立年不明。沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵）の「そのひやふ御嶽御座構之図」「辨之御嶽之図」「小嶽之図」、『図帳／勢頭方』（成立年不明。所蔵は同上）の「首里森図」「そのひやふ図」「辨之御嶽図」「辨之小嶽図」などに、ウタキでの祭礼の図が幾つか遺されているくらいではなかろうか。しかし、これらの図もウタキの全体とイベなどの配置が分かるような図ではなく、祭礼の時の「座構え」（幕の設置、筵の敷設、座敷構えなど）を記したものである。唯一、御嶽の全体の記されたものとしては、同資料中の「さやは御嶽」の「見取り図及び平面図」（成立年不明。所蔵は同上）がある。「さやは御嶽」の全様がうかがえる図である。山や石畳道などと共に、御仮屋の図が記されている。しかし、この図も基本的には、「さやは御

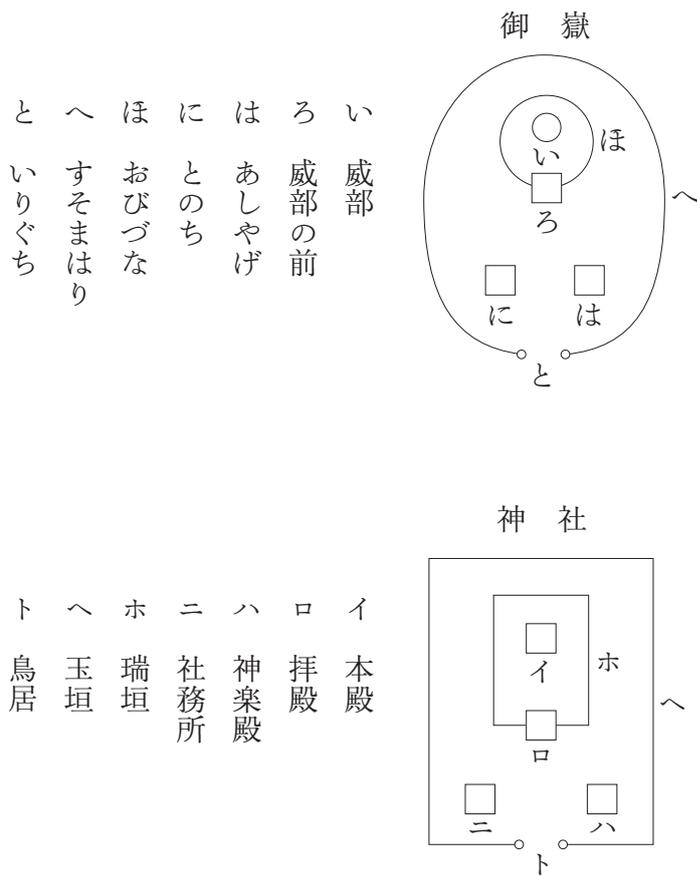


図1 外間守善・西郷信綱『おもろさうし』(1972年 岩波書店) P 499 による

であることについては、すでに戦前期から指摘されている。ここでは宮城真治の示したウタキの構造(図1の上)についてみてみよう。

この図で確認できるように、沖縄諸島のウタキの外周は、年の初めに行われる祭祀の前に左縄(通常の縄とは^な縋い方が異なる。注連縄)で全周を囲う(図中の「へ:すそまはり」)。これは現在でも沖縄本島北部の御嶽、伊是名島の御嶽などで行われており、一つの山林・丘を囲むほどの大規模なものである。この囲みの中に入り口が開かれ、これを入ると森の中に聖所がある。森の奥の方に進むと「ろ:威部の前」となり、その奥に「い:威部」がある。威部は方言でイビという。オモロ語にも「いべ」はあり、古くからの言葉であった。その威部の廻りもさらに左縄で囲われ聖別されている(「ほ:おびづな」)。それは威部こそが神のいますところであり、ここに立ち入ることのできるのは神役の女性のみである。

この図がどこのウタキをモデルに作られたかは不明であるが(沖縄本島北部のウタキとみられる)、現在のウタキの状況と合わない部分がある。それはウタキの入り口左右に「は:あしやげ」と「に:とのち」が配置されていることである。「あしやげ」は方言でアシャギ・アサギといわれる、神を接待するための軒の低い茅葺きの小屋である。現在は、主に沖縄本島北部とその周辺の島々に⁽³⁶⁾ある。『おもろさうし』にも「あしやげ」、「かみあしやげ」(神アシャゲ)、「十いろあしやげ」(十尋アシャゲ)などとみえている。「とのち」は一般に「殿内」と書かれる。ノロが居住し、村の火の神を祀る。方言ではヌドゥンチ(ノロ殿内)と呼ぶ。現在は、集落の周辺や集落内にあるのが普通

嶽」での祭儀に際しての聞得大君ほかの神女および役人衆のための仮屋の構図と、幕や簾・屏風などによる装飾などについて記したもので、イベの様子などが分かるものではない。このように御嶽の構造が分かる絵図資料は管見のかぎり存在しない。

岡本太郎はその『沖縄文化論』で「何もないことのめまい」として、沖縄文化の特質を指摘した。その「何もないこと」の象徴的な例としてウタキ⁽³⁴⁾が取り上げられていた。確かにその通りであろう。しかし、一方では、ウタキに建造物が造られ、様式化といえるか、一つの構造を見せるようになってきているのも事実である。八重山の事例はこれが明治の早い時期まで遡ることを明らかにしている。沖縄諸島のそれについては明確に指摘はできないが、ウタキが一つの構造を有するもの⁽³⁵⁾

で、宮城図のようにウタキの内部にある事例は未確認である。宮城図のとおりだとすると、ウタキは相当に広大で、現在われわれがみるウタキは、かつて（大正～昭和初期）のウタキのうちのイビとその周辺ということになる。宮城図の説明では、ウタキと神社との類同性が幾度も説かれているが、この図は「御嶽信仰」を「国民（民族）的信仰に帰一せしめるようにしたい」という考えを主張するためのモデル化であったのではないか、と思われる。宮城図とその根拠、および説明の検証が必要と思われる。

2) 八重山諸島のウタキの構造

次に八重山諸島のオンの構造についてみてみよう。前項で沖縄諸島のウタキについて図などがほとんどないことを述べた。八重山については、近代以降のものが少しだが、ある。その一つは「八重山村落図」⁽³⁸⁾である。この図には、八重山各村の集落内の家屋等の配置と御嶽が一枚の図面に記され、全体に集落との位置関係が明らかに示されている。そして、注目されるのは、八重山の島々の多くの御嶽にオンヤーがあったらしいことで、同地図で建物を示す四角形が、鳥居の奥の方に描かれている例が、幾つも見られることである。波照間島の「東之村」の図には「嶽」の表示とともに、木々に囲まれた茅葺きの建物がはっきりと描かれている。これと類する地図に明治26年8月「八重山島役所調製」の「八重山群島首部／石垣島石垣港四個村之図」⁽³⁹⁾がある（後掲。29頁参照）。これには石垣市四ヶ村の村内にある、登野城は美崎オン・天川オン・真泊オン、大川は大石垣オン、石垣は宮鳥オン、新川は真乙姥オン・長崎オンが、それこそ森となつて存在していることが記されている。

この二つの地図の描写で特に注意したいのは、これらの御嶽は森の前面が神庭となつて開かれてお

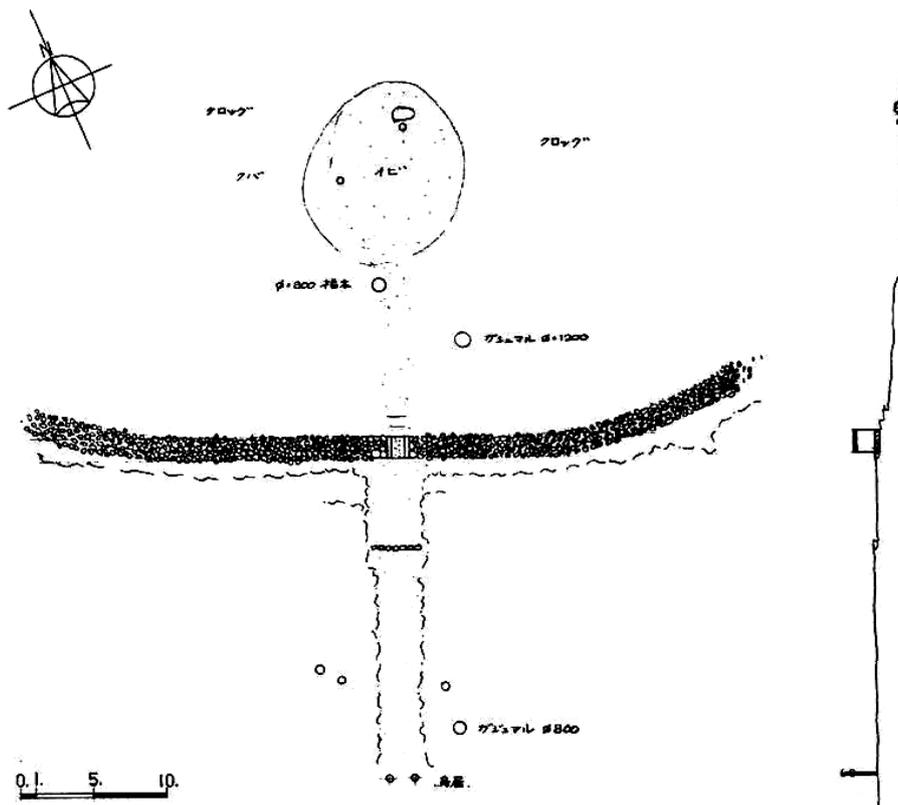


図2 オンヤー（バイデン）のないコーキオン（小浜島）

り、その中央部に建物のあることが示されていることである。いわゆるオンヤー（拝屋）がこの時期にすでに確認されるのである。これは、沖縄諸島や宮古諸島のウタキには現在もこれに相当するものがないのが普通に見られることからしても、八重山のオンの構造化が相当に古くから行われていたことを推測させる。では具体例を見ていこう。

• コーキオン（小浜島）（図2）

小浜島のコーキオンである。海岸近くに位置し、オンは海岸性植物の繁茂する中にある。このオンの特徴は、イベのあるイベ域とその前方部を区切る長い石垣の存在である。石垣はわずかに弧を描くように東西に伸びている。その石垣の中央部に狭い入り口が開かれ、その奥、10 m ほどのところにイベがある。イベにはウル（エダサンゴの破片）・砂が敷かれ、その奥に石で作った香炉が置かれているだけである。オンヤーはない。

• ナウンニウアン（与那国島）（図3）

与那国には現在、全部で13のウアン（御嶽）がある。その内、十山ウアンのみ大きな鳥居と拝屋（拝殿に相当）があり、他の12のウアンはこの図にみるような構造をなしている。ウアンは小さな森の中にあり、人の出入りで自然と開かれたような入り口を入ると、木々の伐り開かれた小さな空間がある。その奥に木造の祠がある。セメントを流した土台の上に高さ150 cmほど、幅120 cmほど、奥行きは各90 cmほどの祠がある。屋根は赤瓦葺きである。床があったか、土台から10 cmほどの高さに棹が作られている。この祠の後方に石を敷き、積み上げたイベがあって、そこには香炉がある。大きさは同一ではないが、この形式は与那国に特徴的なもので、他ではみられない。この形式が何時からのものかは未調査につき不明である。なお、『琉球国由来記』には与那国の13のウアンおよび年中行事その他の事柄も含めて何の記載もない。

• ミシャギオン（石垣島登野城）（図4）

八重山の公儀^{フージイ}オンの最高位に位置するオンである。鳥居が西面して立ち、広い神庭があり、神庭の

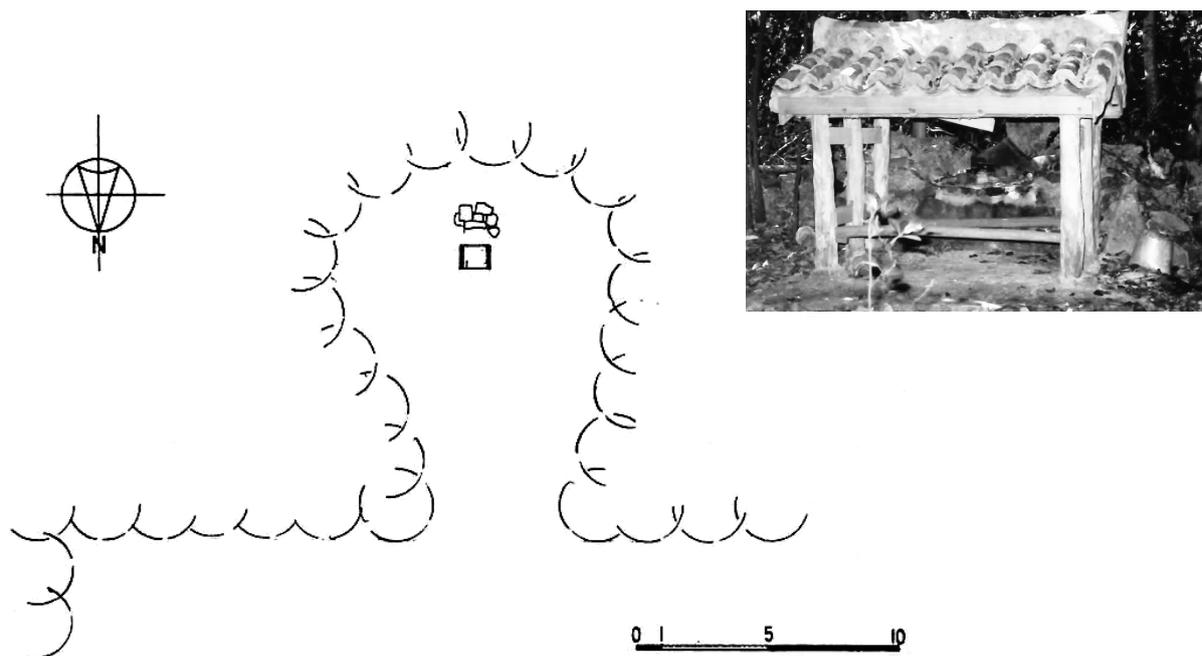


図3 オンヤーはないが、イベの前に小祠が作られているナウンニウアン（与那国）

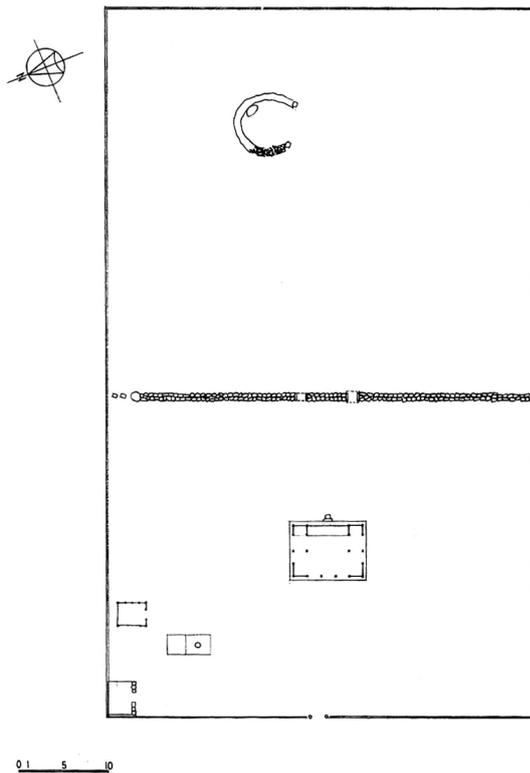


図4 オンの構造を典型的に示すミシャギオン（登野城）

中央部に木造瓦葺きのオンヤ（御嶽家。拝屋）がある。オンヤの内部には奥（東方）にあるイベに向かって南と北にそれぞれカンタナ（神棚）が設けられている。オンヤの奥にも広めの神庭があり、イベの森との間を区切って石垣が積み、その石垣にも南と北に入り口（石造りの門）が開かれている。イビヌマイ（イベの前）である。これをくぐって30mほど行くと馬蹄形に低い石垣で囲われたイベがある。イベの奥にはサンゴ石の一種であるキクメイシの上部を抉って作った香炉がある。他にも同様の香炉や石製の香炉が3、4個置かれている。イベは砂地である。イベのある森は50数年前までは海岸性の植物を中心とする鬱蒼としたジャングルであった。

・イリフダオン（石垣島桴海）（図5）

複雑な形に石垣で区画されたイベ域を持つ石垣島北西部の桴海村のオンである。鳥居をくぐり少し行くとコンクリート造りの小さなオンヤがある。かつて行われていたマユンガナシのお面はこのオンヤの内部に保管されていたとのことである。その奥に石垣があり、イベ域となる。石垣の正面中央部に小さな門が開かれ、これを入るとイベの内部になる。イベの内部は石垣で区切られ、イベ本体は中央の半円形に囲まれた部分にある。

・クモーオン（石垣島宮良）（図6）

石垣島宮良は1771年に起きた大津波（一般に「明和の大津波」と称されるが、これは近代以降の名称）で壊滅的な被害を受け、村の再建の為に小浜島からの寄人（強制的移住）によって再興された。この小浜島からの人々が故郷の神を祀るために創建したのがクモーオン（小浜御嶽）である。先のウタキの分類でみた分祀・勧請型のオンである。しかし、御嶽の構造は宮良村の他の御嶽にもみられるものである。宮良のオンの構造の特徴は、イベ（宮良ではベーダと称する）域が円形に積み上げられた石垣で囲まれ、その入り口がベーダヌマイ（イベの門前）からは石垣で隠された形になっている

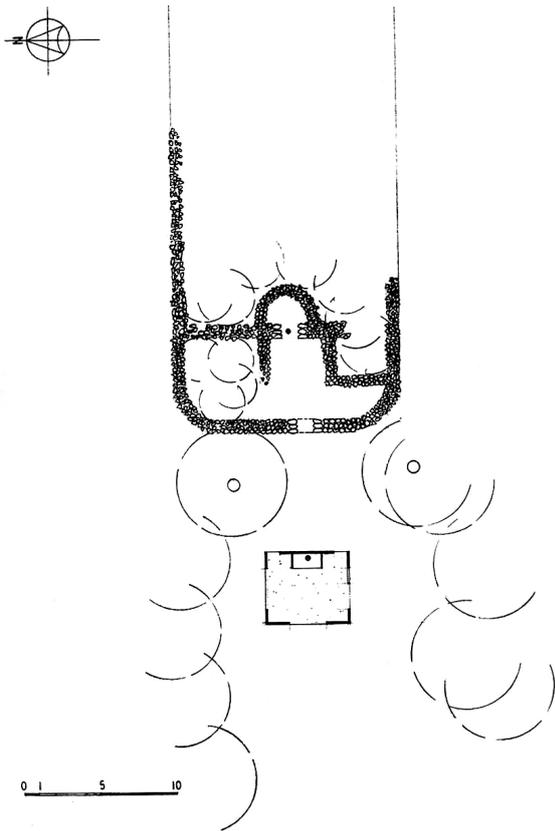


図5 嶽内でもさらにイビは聖別される。イリフダオン (梶海)

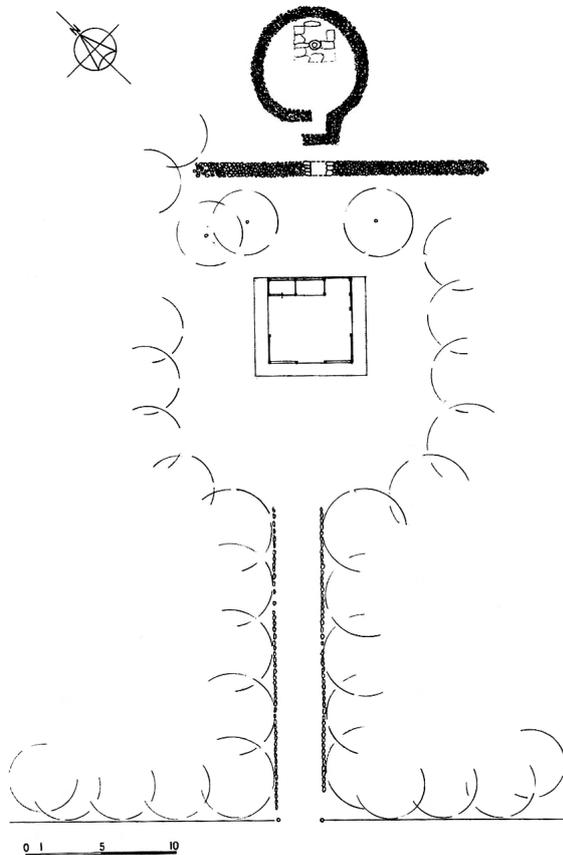


図6 クモオン (宮良) のペーダとウブ

ことである。このオンは国道沿いにあるが、入り口の鳥居をくぐり、20 mほど進むとほぼ方形に開けた神庭となる。神庭の中央部に木造瓦葺きのオンヤーがある。オンヤーの奥所には神棚^{カンタナ}がある。

オンヤーの後方にはペーダがある。ペーダはフクギや灌木の林の中にある。そのペーダのある林とオンヤーとの間は石垣で区切られている。オンヤーの中央部真後ろに当たるところに入り口が開かれている。石垣はこの部分が最も高く1.5 mほどで、これから左右に次第に低くなって、それぞれ6~10 mで端の方は地面となる。このペーダの入り口に入って左に折れて僅かに進んで右に折れるとペーダの入り口となる。ペーダは低い石垣でほぼ円形に囲まれている。その内側はウルなどのサング片と白砂が敷かれ、その奥に石を方形に積んだ台の上に円形の素焼きの香炉(直径約30 cm?)が安置されている。

・マイチバーオン (石垣島新川) (図7)

これまでにみてきたオンは、クモオンを除くといずれも「神霊発現型」に分類されるものであった。ここで「英雄縁由(居住地・墳墓地)型」の例として、マイチバーオンをみよう。このオンは石垣市字新川にある。現在は市街地の中に取り込まれてしまったが、かつては集落の北端部に位置していた。周囲を高さ60 cmほどの石垣(上部はコンクリートで補強してある)で囲まれた方形の敷地で、前後左右を道路が通っている。南に向かって入り口が開いている。入り口にはコンクリート製の鳥居が立ち、入ると砂地の神庭となる。神庭の正面に壁・柱などがコンクリート造りの瓦葺きの寄せ棟造りのオンヤーがある。オンヤーの正面奥部の左と右にはカンタナ(神棚)がある。オンヤーの後方には石垣で囲われたイベ域がある。その石垣の高さは140 cmほど。オンヤーの正面奥から出ると、すぐイビヌマイとなる。イベの正面に開いた門を入るとイビとなる。イビはマイツバーの墓である。墓はほぼ直方体に石を

積み上げたものである。イビの後方及び左右の空き地にはフクギなどの喬木が生えている。

・八重山のオンの構造

以上、八重山のオンの構造についてみてきた。これをモデル化すると以下（図8）のようになる。

八重山のオンは他の地域の御嶽と比較すると、概して構造が明確になっているといえる。一般にオンは山、丘、海浜などに立地する他、村内（集落内、及びその周辺）にも立地する。いずれの場合も嶽域（オンの範囲）は樹木が茂り、オンそのものが森や林を形成し、その中に聖域空間が包含されている。オンのことをヤマと称するのも、このような立地に因むものであろう。オンの中には日常的には出入りしない。特に男は祭礼の時以外は立ち入りが禁じられている。波照間島の三つのピテヌワー（野原の御嶽。マートゥリィ〈真徳利〉・シィサバル〈白郎原〉・アバティ〈阿幸侯〉の3御嶽）には年に1回行われる清掃の時以外は男性の立ち入りは絶対禁止であった。

八重山のオンの中で、沖縄諸島の事例にみたように嶽域全体を注連縄で囲う事例は、未見である。イベの正面の石垣を注連縄で区切る例は崎枝などにある。オンの正面には鳥居がある。現在はほとんどがコンクリート製で高さ2.5m～3m前後である。間口は2間（3.6m）前後である。この入り口から入って進むと砂の敷かれた庭となる。ミャーあるいはメーと称される神庭である。プーリィ（豊年祭）やキチガン（結願祭）などの村を挙げての祭事にはここで様々な奉納芸能が演じられる。神庭の奥には大体が木造瓦葺き平屋のオンヤー（拝屋）がある。オンヤーの内部は板張りの床となっているものが多いが、コンクリート敷きになっているオンもある。祭事には筵などが敷かれる。昭和30年代まではチカサの座にはインチャ（円座）という直径が50～60cmの藁製の敷物を敷いた。オンヤーの奥部にはカンタ

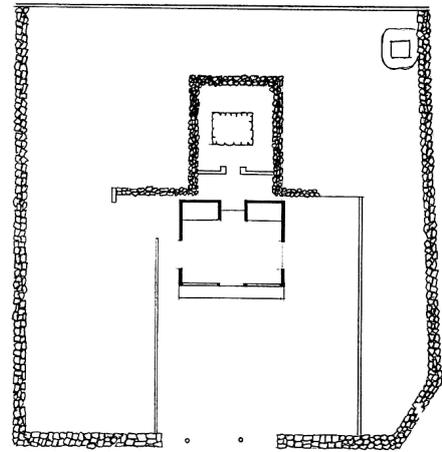


図7 マイチバーオン（新川）のイビ。イベ域中央はマイチバーの墳墓

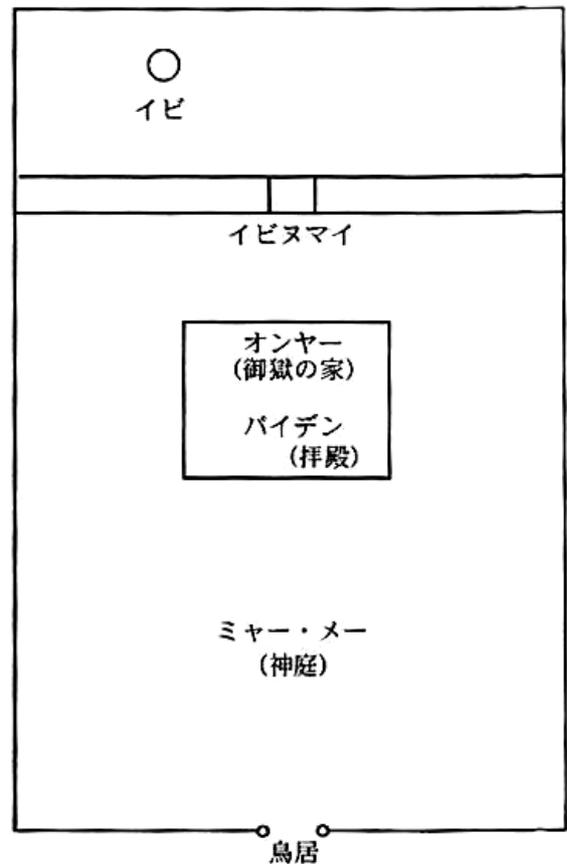


図8 八重山のオンの構造

ナがある。カンタナは高さ90cmほどのところに床を設け、中央に香炉・花生け（一对）・湯飲み（一对）などが置いてある。イベでの祭祀に先立って線香を焚いての拝礼・祈願がなされる。イベでの祭祀の後にもここで拝礼・祈願が行われる。オンヤーの奥にはイベ域がある。イベ域を聖別するために石垣で囲ったり、区切ったりしている。この石垣の中央部にイベへの入り口となる門が設けられ、その中央部あるいはたもとにも香炉が置かれ、イベに入る前に線香を焚いて拝礼・祈願が行われる。一般にこの地点からイベの香炉を直接みることはできないようになっている。これは例えばミシヤギオン（美崎御嶽）の図（図4）で見ると、イビヌマイ（イベの前）の門とイビとが一直線に並んでいないことなどから分かる。宮良のクモーオンのペーダ（イベのこと）の入り口がペーダヌマイ（ペーダの前）から左方向に回ってからしか入れないようになっているのは、その形がより明確に表現されたものであろう。イビ域の中に入るとその奥所にイビがある。石灰岩の石柱などの霊石がイビとなっている例もあるが、ご神体を示すものは何もなく、香炉（キクメイシの頂部を削り円形に穴を^{えぐ}抉って砂を入れたものや琉球石灰岩を方体に加工したものなど。陶製のものやコンクリート製のものなどもある）があるだけの例も多い。イベの中にはチカサとその補佐役の神役の女性だけしか入れない。男性が中に入るのは厳に戒められている。

これが八重山のオンの構造である。詳しいことについては先に拙稿に述べた⁽⁴⁰⁾。ご参照いただきたい。

V 御嶽と祭祀

(1) 八重山の御嶽と祭祀

近世期琉球における各地のウタキでの祭祀については『琉球国由来記』の「各処祭祀」（巻12～21）の御嶽の項の記述や『仲里間切旧記』（1703年?）しか手がかりはない。しかし、『琉球国由来記』の記述はほとんどが【事例5】の「右式ヶ所、座安巫崇所」のような記述しかない。特定の祭祀については、これも例に引いたが、豊見城座安の大アスメでの雨乞いが「間切中、巫・掟アム・位衆・サバクリ中相揃、御崇仕。鍋ニ潮汲、大アスメニカケ、保栄茂ノロ、鍋戴キ、七廻タリテ、雨乞仕也」（『琉球国由来記』12-84。間切中のノロ・掟阿母・位衆・役人中が揃って神への拝礼・祈願を行う。鍋に潮水を汲んできて、大アスメのご神体に向け、保栄茂ノロが鍋を頭に載せて大アスメの周囲を七回回って雨乞いをする）という形で執り行われることが記されており、これは参考になることが多い。しかし、全体としては情報が圧倒的に不足していると言わざるを得ない。現在沖縄諸島各地のウタキでの祭祀についてはその準備がないので、ここでは八重山のオンにおけるプーリィの状況をモデル化したもので説明したい。

これはプーリィで唱えられニガイフチィ（願い口。祈願の呪詞）や歌謡とオン空間がどのように関わっているかを示すものである。この図（図9）では、祭祀空間の核点をイビにおいてある。それは祭祀の最も核となるのは神への感謝と祈願と考えるからである。ここでの司祭による祭祀はまた祭祀全体の時間的起点とも捉えうる。従って、イビは祭祀の空間的核点であり、時間的起点ともなる。そして、祭祀の時間的推移に従って祭祀空間が、聖性の薄い方向へと移動・拡大していくことが分かるようになっている。また、この祭祀空間の移動と拡大は、祭祀者および祭祀参加者の増加をもたらし、唱え・謡われる歌謡ジャンルの変化をもたらし形になっていることも示している。白保のプーリ

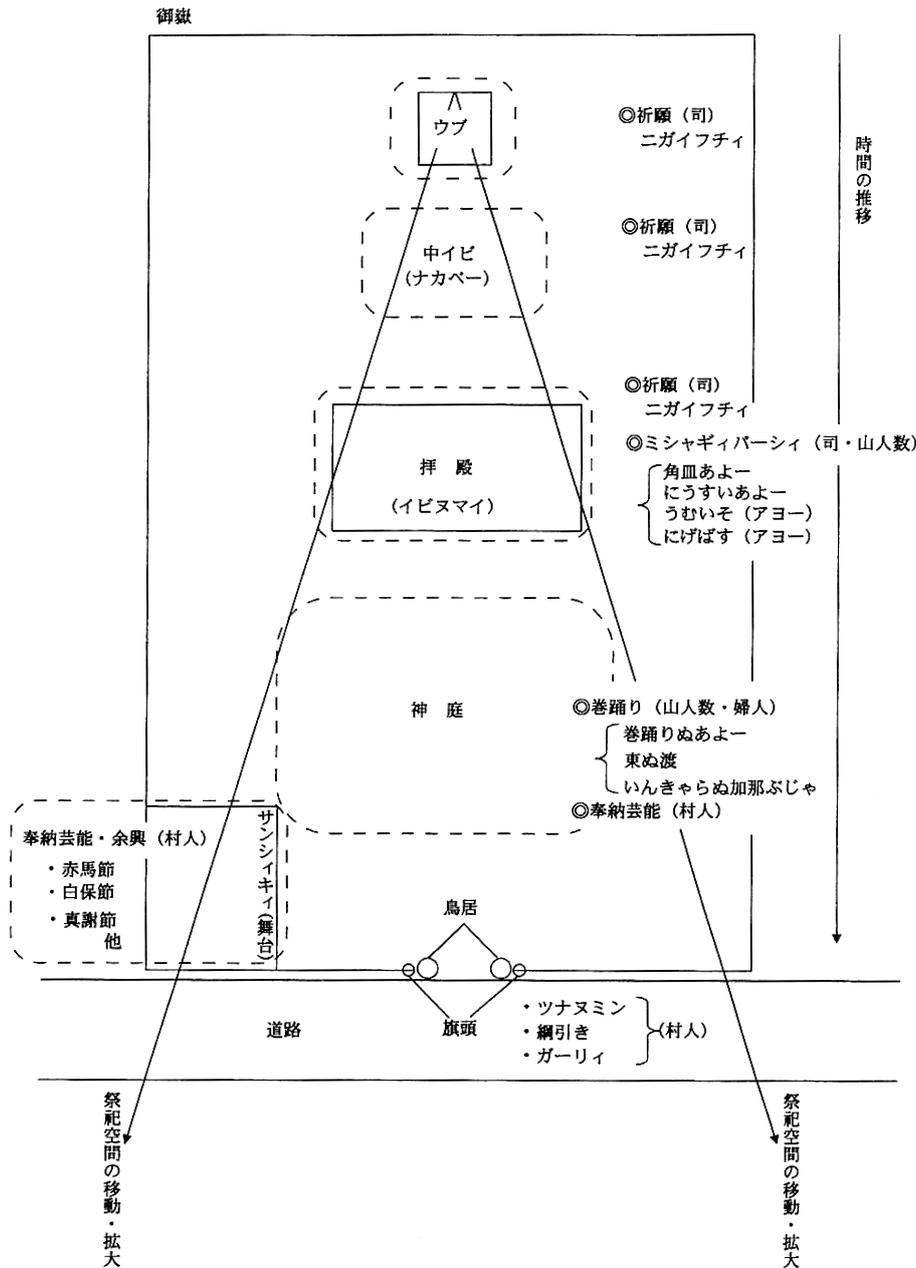


図9 石垣市白保の豊年祭の祭祀空間と歌謡の相関モデル図

ン（豊年祭）では、イビ・中イビではチカサ（司＝神女）によってニガイフチ（願い口＝願詞）が唱えられ、イビより道路方向に移動した地点にあるオンヤ（拝み屋＝拝殿）ではチカサによるニガイフチ、ヤマニンジュ（山人数＝御嶽の祭祀集団）によるアヨー（祭祀儀礼歌謡）の歌唱がある。その建物から道路方向へ出るとミャ（神庭）で、そこではニガイフチが唱えられることはなく、ヤマニンジュによるアヨーを中心にした歌謡が謡われ、巻踊り^{まきおど}が踊られる。また、所によってはミャの一角にサンシキ（^{まきおど} 棧敷＝舞台）が設けられ、村人男女による奉納芸能が演じられる。奉納芸能は儀礼的な荘重なものから、娯楽性のあるものまで幅広い出し物が準備される。その地謡には節歌や口説歌謡から新民謡に至るまで多岐にわたっている。御嶽の入り口に旗頭が立てられるが、旗頭は単なる飾りではない。石垣市登野城などではウフクムチ（大供物）と称し、ヤマニンジュによる拝礼に先だってミャに進み入り、神前に捧げられる。拝礼が済むと旗頭持ちが持ち上げて、ミャ

の中をあたかも旗頭が舞うように氣勢を上げ、その後、入り口の鳥居のわきに立てておく。御嶽の前の道路では豊穰を祈願した綱引きが行われる。石垣四ヶ村では綱引きに先立って、サイリーによる「五穀の授受」の儀礼（戸板を組み合わせて造った小棧敷を若者が頭上高く持ち上げ、その上で無言劇として演じられる）、村人のガーリィ（競舞）、チナヌミン（「五穀の授受」と同じ舞台装置の上で、二人の武者——東は槍を手にした武士、西は鎌を両手に持った百姓と言われている）の戦い）が行われる。綱は石垣島では一般に東西に別れて引く。これは、東は豊穰の源である海上他界ニール（沖縄諸島でいうニライ・カナイ）のある所であり、そこからもたらされる豊穰を人間世界である西の方へ引き揚げる、という想念に基づくものである。この綱引きには村の老若男女のみならず、来訪者・観光客までもが参加する。その意味で、この儀礼は祭祀を構成する一つの要素であるが、俗的な部分もまた混在している。それは、これが道路という日常の空間を利用していることから指摘できると思う。

なお、御嶽での祭祀と芸能の奉納については、竹富島のタナドゥイ（種取祭）、小浜島のワンポーリィ（御嶽の豊年祭）・キチゴン（結願祭）などを「竹富島タナドゥイの祭祀と歌謡」「小浜島のワンポーリィの祭祀と歌謡」「小浜島の結願祭」（いずれも拙著『南島祭祀歌謡の研究』収載）で報告してある。ご参照いただきたい。

VI 現代の御嶽——信仰の形骸化と御嶽の改変

(1) 近代におけるウタキの改変

IV章の「(2) 沖縄のウタキの構造」で紹介した「八重山群島首部石垣島石垣港四個村之図」には、「四箇村」のオンが広大な森となって記されていた（図10参照）。これが、それ以後どうなっていたかは、現在のこの地図に記されたオンの現状をみれば明らかである。オンの広大な森は伐り払われ、学校や公共機関の敷地、民間の宅地となった。例えば、登野城の美崎オン・天川オン・真泊オンの森は一部は住民の宅地となったが、そのほとんどは、裁判所・刑務所などの官庁施設となった。大石垣オンはほとんどが公の施設と住宅地となり、宮島オンは後方の森全部が小学校の敷地となった。このように近代に入って、石垣市内のオンは相当に森を喪失したといえるが、これが官主導で行われたことは想像に難くない。民間の住宅地となった部分についても、オンの森の払い下げが行われたためであろう。このあたりのことについては近代八重山の歴史の問題として明らかにされる必要がある。本稿でこの問題を明らかにする準備はない。問題の指摘のみにとどめておきたい。

(2) 戦後の改変——米軍基地化とウタキの集合化

戦後にも沖縄のウタキは相当な改変を被っている。それは主に米軍基地建設のための改変である。その事例の一つとして那覇市の小禄地区におけるウタキ・拝所の集合化がある。那覇市小禄の金城・安次嶺地域には米軍の飛行場に付帯する施設が多数造られた。そのため、安次嶺地区ではウタキ・拝所の集合化を余儀なくされた。ここでは公園の一角に安次嶺嶽の他、村の火の神、井泉の水の神、門中の拝所などが一箇所に集められている。集合化の時期・移転工事など細かなことについては調査ができていない。後日を期したい。

八重山群島首部石垣島石垣港四個村之図 (明治26年8月八重山島役所調製)

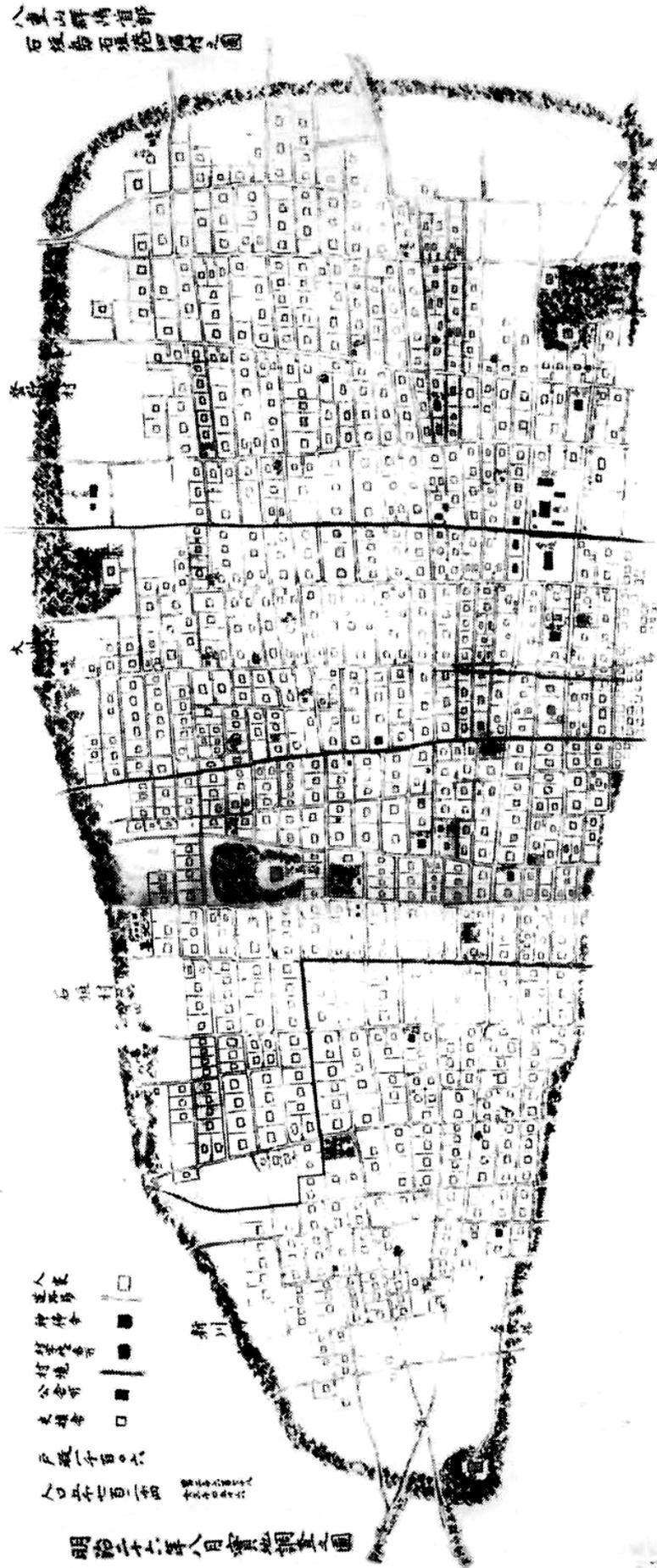


図10 「八重山群島首部石垣島石垣港四個村之図」(牧野清『登野城村の歴史と民俗』口絵より)

(3) 現代の改変——都市計画とウタキの集合化

ウタキ・拝所の集合化は近年にも起こっている。それは、道路の新設などの都市計画によって行われたものである。その一例が豊見城市真玉橋地区におけるウタキ・拝所の集合化である。この御嶽・拝所の集合化については次の碑文が事情を尽くしている。他の事例にも通じる部分があると思われるので全文を引用する。

真玉橋地内の拝所は二十四か所に点在し、集落の開闢／以来、⁽⁴¹⁾字民・各門中が⁽⁴²⁾祭祀し、現在に至っている／この地大井の上は地頭火神・水の神・骨神が祭られ／字民の健康と豊年を祈願した由緒ある聖地である／平成六年国道三二九那覇東バイパス工事により道路／敷になったため、東り原の白泉・今帰仁井、遊庭（旧／村屋跡）の火の神・骨神・御井をこの地に整備移転／合祀した。／平成六年六月吉日／真玉橋字民一同

これによると、都市計画による道路新設のために御嶽・火の神・井泉の神・骨神などの拝所がその敷地を失うことになったのでこの地に集合化した、というのである。現在、この地の中核部に「大井之御嶽」があり、その背面と右に井戸の神・骨神、左手に地頭火の神・村屋の火の神の祠がある。都市計画という公共の利益のために、おそらく有史以来、村の信仰に重要な役目を果たしてきたウタキ・拝所が移動させられるということが行われているのである。このようなことは今後も沖縄の各地で行われることであろう。公共の利益という、不可避的と思われる事由によるウタキの改変である。これは近代期に行われた八重山石垣四ヶ村のオンの森の喪失という問題と共通するものである。

(4) 御嶽の破壊——石垣島登野城のフノーラオンの場合

以上にみた、時の大きな権力の計画（米軍基地建設）や公共の利益のためという理由でウタキやオンが改変された事例とはまったく別の理由で、それがなされる事例がある。⁽⁴³⁾

再三の引用になるが、「八重山群島首部石垣島石垣港四個村之図」には登野城の海岸地帯に美崎オン・天川オン、真泊オンを含む大きな森があった。この森の中、少し西の海岸に近い所に位置していたのが船浦オンであった。このオンは1980年代の前半までは、入り口に鳥居が立ち（その左にはガジマル、右にはアコー、ヤラブの木が生えていた）、赤瓦葺きのオンヤーがあり、その東にはミャー、南東にはイビがあった。イビはサンゴ石の低い石垣でほぼ方形に囲われ、その中央部にはガジマルの古木が生えていたが、その木はミャーとオンヤーの屋根を覆うほどに枝を広げた巨木で、天然記念物に指定されてもおかしくないほどのものであった（図11参照）。それが1988年ごろに突如として、重機によって御嶽の石垣、鳥居、オンヤー、イベの石垣、イベのガジマル、周辺にあった樹木にいたるまで撤去され、更地となった。そして敷地の中央部に建物のコンクリートの基礎が敷設された。私は知人から知らせを受けて現地の状況を確認したが、あの神々しいイベのたたずまいも巨大なガジマルの姿も完全に消え失せ、建築工事の途中で放置されたままになっているのを見、無慚な思いにとらわれた。⁽⁴⁴⁾これが近世期八重山の海運と船舶の安全を守護する神として尊崇されてきた^{フノーラ}船浦オンの変わり果てた姿であった。敷地の南西角に小さなコンクリート造りの祠があって、訪ねる人にはここが拝所であることをわずかに知らせていたが、このオンの側で生まれ育った者としては、なんとも



図 11 1980年代半ば頃の船浦オン



図 12 船浦オンはこわされ、旧敷地の一角に祠が設けられた（2017年）

すさまじい改変（破壊）である。

その後、この状態が長く続いたが、2015年になってここに5階建てのマンション・アパートが建つことになった。そして2016年に船浦オンの敷地いっぱい建てられたこの建物は完成した。その敷地の南西角には、道路に接して前のものよりは立派に見えるコンクリート造りの祠が建てられ、その前には陶製白色の大振りの香炉が置かれている（図12参照）。もっとも、この香炉と祠には問題がある。それは祠と香炉の向きである。船浦オンは船と海に関わるオンであるから、当然、イベもイベの香炉も海に向かって配置されていた。だが現状はまるで逆である。道路から陸地の方に向かって祈願がなされるようになってきているのである。これは一つの推測であるが、敷地の関係上、海に向けての祠の設置ができなかったのであろう。このことは本来はけっして小さな事ではない。どの神を何のために拝むのか。これは御嶽信仰の根幹に関わることである。しかし、このようなことを言っても、オンの消失の前には如何ほどのことでもない。こうして一つの由緒あるウタキはこの地上から姿を消していったのである。

この事例は、一つの経済的活動の結果として生まれたことである。時の政府や権力、公共の利益の為などによる改変とは別の事例である。この事例に類することが沖縄の各地で起こっているようである⁽⁴⁵⁾。現代沖縄における伝統文化の変容の事例である。ウタキという沖縄の人々の信仰、宗教観と深く関わって存在したものが、今、様々な理由で改変され、あるいは破壊されていっている。もちろんこれは、御嶽信仰を支える神女組織の衰退、そして産業と社会構造の変化による村落祭祀の衰微なども大きく関わっていることは間違いない。

「沖縄の心」という曰く言い難いものがある。その形成に御嶽信仰が無縁であったとは思われない。御嶽信仰はウチナーンチュ（沖縄人）のアイデンティティーに関わるもののように思う。これほど重要なものに思われる御嶽信仰は、今後どうなっていくだろうか。その行く末を見守っていきたいと思っている。

注

- (1) 羽地朝秀 1650『中山世鑑』。伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編 1972『琉球史料叢書』5 p13 東京美術。
- (2) 外間守善・波照間永吉編 1997『定本 琉球国由来記』p29 角川書店。以下、『琉球国由来記』からの引用は本書による。
- (3) 同書 p303。
- (4) 『おもろさうし』は全22巻、1554首のオモロを収録。第1巻は1531年、第2巻は1613年、第3巻以下は1623年の成立（但し、第7・14・17・22巻は編纂年不明）。なお、オモロの引用は、外間守善・波照間永吉編 2004『定本 おもろさうし』角川書店の校訂本文を基に、漢字・ひらがな表記に変えた。
- (5) 国立国語研究所編 1963「ŋugaN」の項『国立国語研究所資料集5 沖縄語辞典』大蔵省印刷局。
- (6) 仲宗根政善 1983「うガーミ」、「タキー」の項。なお、アクセントの表記は略した。『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店。
- (7) 首里グスク内の「十嶽」は以下の通りである（『琉球国由来記』によって示す）。

1 御内原ノマモノ内ノ御嶽 神名 ウチアガリノ御イベ／2 ミモノ内御嶽 神名 カワルメノ御イベ／
3 キャウノ内ノ前ノ御ミヤ首里ノ御イベ／4 キャウノ内ノ御嶽 神名 シキヤヂシキヤダケノ御イベ／5
キャウノ内ノ御嶽 神名 ソノイタジキノ御イベ／6 キャウノ内ノ御嶽 神名 アガルイノ大御イベ／7

真玉城ノ御嶽 神名 玉ノミヤノ御イベ／8 寄内ノ御嶽 神名 ミヤガモリノ御イヘ／9 寄内ノ御嶽 神名 カミヂヤナミヤデラノ御イベ／10 アカタ御ヂヤウノ御嶽 神名 アガルタケ押明森ノ御イベ

なお、『女官御双紙』は首里王府編、1706～1713年頃の成立とされる。

- (8) 例えば、高嶺間切中城村の「城内之嶽 式御前」(巻12-264)、真壁間切真壁村「城内ノ嶽」(巻12-315)、勝連間切南風原村「城内玉ノミウヂ嶽」(巻14-406)、同「同(城内)肝タカノ嶽」(巻14-407)、与那城間切宮城村「城内之嶽 二御前」(巻14-452)、具志川間切具志川村「具志川城内御イベ」(三御前。巻19-1)、仲里間切儀間村「イシキナハ御嶽」(三御前。巻19-48)、同宇江城村「仲里城御嶽」(六御前。巻19-50)など。
- (9) 仲原善忠 1977「おもろ新釈」『仲原善忠全集』2 pp 170・171 沖縄タイムス社、など参照。
- (10) 「君手摩りの百果報事」を国王の一世一代の行事とする(『中山世鑑』巻1「琉球開闢之事」に「キミテズリト申スハ、天神也。国主世継ノ後、一代ニ一度、出現有テ、国主万歳ノ寿ヲ、シ給神也」とある)のは誤り。例えば、『おもろさうし』巻4-209と巻12-743には尚寧王の「君手摩りの百果報事」が「万曆三拾五年未^{ひつ}の年」の「拾月十日己^{つちのと}の巳^みの日」と「万曆三十五年^{とし}未^{みづのと}の年」の「拾月十五日癸^との酉^{とり}の日」の2回、巻12-694・695・732・733には「尚元王」(年紀に従えば「尚清王」である)の「君手摩りの百果報事」が「嘉靖廿四年^{とし}己^{つちのと}の年」の「八月十九日己^との酉^と日」、「嘉靖廿四年^{とし}己^との年」の「八月廿五日乙^{きのと}の卯^うの日」、「嘉靖廿八年^{とし}己^{つちのと}の年」の「十月廿一日丁^{ひのと}の巳^みの日」、「嘉靖廿八年^{とし}己^{つちのと}の年」の「十月十三日己^との酉^との日」の4回、巻12-735・737・739には「尚永王」の「君手摩りの百果報事」が「万曆六年」の「十月十五日癸^{みづのと}の巳^との日」、「万曆六年^{とし}己^{ひのと}の年」の「十月十九日丁^との酉^との日」、「万曆十五年^{とし}己^{みづのと}の年」の「十月十八日癸^との酉^との日」の3回行われていることが詞書として記されている。
- (11) 西郷信綱は「豊旗雲」を解説する中で「豊だけでなく旗もまた神にぞくするものであった」と述べている。1970『万葉私記』p 88 未来社、参照。
- (12) 拙著 1999『南島祭祀歌謡の研究』砂子屋書房、参照。
- (13) 仲松弥秀 1983「御嶽」沖縄タイムス社編『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、による。
- (14) 牧野清 1990『八重山のお嶽——嶽々名・由来・祭祀・歴史——』あ～まん企画、による。
- (15) 琉球政府文化財保護委員会監修、真栄田義見・三隅治雄・源武雄編 1972『沖縄文化史辞典』東京堂出版。
- 比嘉政夫 1976『琉球国由来記』に見る地域差——御嶽の神名などをめぐって——『南島——その歴史と文化——』1 国書刊行会、参照。
- (16) 首里王府編『古事集』(1726～1735年の間)。拙編 2006『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇Ⅱ)民俗・宗教』p 765 沖縄県立芸術大学附属研究所、参照。なお、この「古重嶽」の「神名」には、神や王をはじめ尊貴なる存在に対して用いられる接尾語「カナシ」(「愛し」が原義)が用いられていること、「羽地コイチコイチヨウ」の名が後ろに記される縁由の「羽地巫」の名とみられる可能性のあることなど、御嶽の「聖名」というには疑問に思われる部分がある。あるいは、祀られることになった「羽地巫」にまつわる神の名の可能性もある。もしこれが認められれば、上記の通説は改めて検討されねばならない。
- (17) 首里王府編『遺老説伝』(1745年か)。嘉手納宗徳編訳 1978『球陽外巻 遺老説伝』p 123 角川書店、参照。
- (18) 首里王府編 1731『琉球国旧記』。伊波普猷他編 1972『琉球史料叢書』3、p 119 東京美術、参照。
- (19) 沖縄諸島の神女組織と祭祀組織については、宮城栄昌 1979『沖縄のノロの研究』吉川弘文館、第一章「村落の形成と神女」、第二章「神女組織の確立と変遷」を参照。宮古平良西原の事例については、上原孝三 1983「宮古西原のユークイ素描」『沖縄文化』60 沖縄文化協会、同 1986「宮古西原のユークイ歌謡」『沖縄文化』66 沖縄文化協会、八重山の事例については、注(12)前掲書、を参照。
- (20) 拙稿 1997「解説」『定本 琉球国由来記』角川書店、参照。
- (21) 注(13)仲松、前掲書による。
- (22) 牧野清 1972「御嶽信仰について——その歴史的考察——」『琉大史学』8 琉大史学会、に「八重山に

おける御嶽成立の縁起は、△神の託宣によるとされているもの／△渡来神を祀るとされているもの／△開拓者又は共同社会の貢献者を神としてその墓を祀るもの／△霊石または漂流石の奇瑞によるもの／火の神を嶽として祀るもの（ピナカンオン）／△牧場の牛馬の繁昌を祈願するために建てられたもの（ウシィヌオン）／△水元の神を祀るもの（ミジィムトゥヌオン）／△豊漁の神を祀るもの／△旅の安全を祈るために建てられたもの（タビオン）／など千態万様であるが、御嶽は元来自然神が多く、後次第に人格神も祀られるようになったのではないかと考えられる」とあるのをもとに、筆者が整理した。なお、「⑤火の神」について、これを御嶽の神とするかどうかは議論の分かれるところである。すなわち火の神は、小は各家庭の竈から大は国家の最高神女たる聞得大君御殿に祀られるものまでであるが、ウタキに祀られる神ではない。火の神と御嶽の神は峻別されるという立場がある。筆者もこの立場に立っており、上記の『琉球国由来記』の御嶽の数に火の神を祀る拝所は含めていない。

- (23) マンガナシィ（真世神様）は一年の豊饒をもたらす来訪神。古くは石垣島の北西海岸に位置する川平・仲筋・桴海・野底・伊原間・平久保などの村で行われていたと目される。現在は川平でマンガナシィ神が出現して祭祀が行われている。伊原間ではマンガナシィ神の面を飾り、それに対する祭祀が行われている。桴海でのマンガナシィ祭祀については拙稿「カミを呼ぶ」（1986年1月29日付『沖縄タイムス』文化欄）で触れたことがある。なお、注（14）牧野、前掲書 pp 281・282、も参照されたい。
- (24) 拙稿「袖垂れ小考」注（12）前掲書、所収。
- (25) 折口信夫 1947 初版「女の香炉」『沖縄文化叢説』中央公論社、参照。
- (26) 沖縄古語大辞典編集委員会 1995『沖縄古語大辞典』角川書店、「すじや」の項参照。
- (27) 例えば、外間守善 1976『鑑賞日本古典文学講座 25 南島文学』pp 31～37 角川書店、池宮正治 1976『琉球文学論』pp 93～124 沖縄タイムス社。
- (28) 宮古歌謡の「池の大按司鳴響み親のアーグ」（外間守善・新里幸昭編 1977『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』pp 269～271 角川書店）、「まつさびがアヤゴ」（同書 pp 307～308）の女主人公がマッサビ。マッサビは神の求婚を拒否して八重山オモト山中に逃げるがそこで死ぬ。その後死体から巨木が生える（死体化生説話）が、この木は切り倒され、役人の乗る船が造船される、という内容の歌。マッサビはマシラベの「シラ」の部分音が音変化して出来た語形。「シラ」から「ッサ」に変化するの、八重山語でも「シラホ」（白保。地名）が「ッサブ」、「シラレ」（知られ）が「シィサリ」→「ッサリ」となるように、普通にみられる。
- (29) 喜舎場永珣 1967『八重山民謡誌』pp 157～158 沖縄タイムス社、参照。
- (30) 注（14）牧野、前掲書 pp 251・252、参照。
- (31) 島袋盛敏・翁長俊郎 1968『琉歌全集』武蔵野書院、参照。
- (32) 『球陽』148 項に「時に一神を生ずる有り、名づけて伊里幾屋安真理と曰ふ。始めて人民に耕種・飲食を教ふ」とある神。八重山の村人はこの神を信仰し神遊びを催すようになっていくが、王府はこのイリキヤアマリ神の祭祀を「俗説に係り、未だ実に其の事有らず。而して多く民力を傷ひ、民財を妄費す。是の年（尚真王 10 年 = 1486 年——筆者注）に至り、毛国瑞（恩納親方安治）、命を奉じて八重山に至り、農を勧め俗を整へ法式を制定す。時に固く其の祭を禁裁す」とある。
- (33) 拙稿「八重山の御嶽信仰習俗」。原題は 1988「八重山の御嶽信仰習俗覚書」『沖縄芸術の科学』1 沖縄県立芸術大学附属研究所。後に注（12）前掲書に収録。
- (34) 岡本太郎 1972『沖縄文化論——忘れられた日本』（1972 年 中央公論社。1996 年 文庫本。pp 165～172）中央公論社。
- (35) 宮城真治 1954 初版・1972 第 2 版『古代の沖縄』pp 16～26 新星図書、参照。
- (36) 一般には、4 本のサンゴ石灰岩などの石柱の上に寄せ棟型の屋根を載せた建物で、壁はない。床は土間で奥の方に神の座であるタムトゥギー（たもと木。長さ 3～4 m の一本の丸太のこと）が置かれている。屋根は茅葺きで軒が下方に低く垂れている。そのため、中に入るときは頭を下げ、かがまないといけない。
- (37) 注（35）宮城、前掲書 p 28、参照。
- (38) 成立年不明。明治 23 年に八重山島役所に赴任し、同 29 年帰京した埸忠雄氏が所蔵していた。温故学会

旧蔵、現在は沖縄県立図書館蔵。本稿では石垣市史所蔵の写真版と1989『八重山古地図展——手描きによる明治期の村絵図——』石垣市役所、を利用した。

- (39) 牧野清 1975『登野城村の歴史と民俗』自家版、口絵参照。
- (40) 注(33) 前掲論文に同じ。
- (41) 「字」は市町村を細分する区画で、ここでは大字おおあざをいう。この「字民」は豊見城市字真玉橋の住民のこと。
- (42) 「門中」はムンチューと発音する（日本語式の発音では「もんちゅう」）。始祖を共通にする父系の血縁集団のこと。沖縄島の中南部を中心に沖縄各地にひろがっている。宮古・八重山では「一門」（イチムン）がこれに相当する。17世紀ころから士族階層を中心にひろまるとされる。
- (43) この事例は法律の認めた個人の権利の行使としてなされたことである。筆者は、その個人の権利に基づく行為を非難するものではない。歴史的事実の報告であることをお断りする。
- (44) この出来事については「破壊された船浦御嶽」と題したエッセイを書いた（1990年11月6日付『沖縄タイムス』）。ご参照いただきたい。
- (45) この事例よりも前に、西原町の某所でウタキの敷地にアパートを造ったという事例がある、と聞いている。